
【原作知識なし】リリカルでフェレットなスクライア物語【転生、TS】

千尋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【原作知識なし】リリカルでフェレットなスクライア物語【転生、TS】

【Nコード】

N6149M

【作者名】

千尋

【あらすじ】

ある大学生の青年は目が覚めたら死んでいた。だが、天使と名乗る少女が転生させてくれると言い、喜ぶのだが

原作は魔法少女リリカルなのはで、原作知識なし転生TSオリ主ものです。更新はゆっくり、駄文になると思いますが、それでもという方は暇潰しにでもどうぞ。

第1話（前書き）

間違いや指導がありましたら、気軽に書き込んでください。
改行と修正しました。

第1話

寝ぼけ眼を右手でこすり、意識の覚醒を促す。うーん、と伸びをし上半身を起してみると、目の前には辺り一面真っ白い世界。

おかしい、昨日は自宅のベッドで寝たはずだ。ここはどこだろう。「誘拐されたのでは？」という事態を考慮しつつ辺りを見渡すと、後方に羽の生えた可愛らしい黒髪の女の子が、若干気まずそうな顔で立っていた。

「ご、ごめんなさい！私の不手際で、あなたを死なせてしまいました！」

そう言つて、何度も何度もすごい勢いで頭を下げ続ける女の子。

「あ、え、えーと、すいません。言っていることがよく分からないのですが」

「そ、そうですね。説明もなしにいきなり何を言っているんですよね。私の馬鹿馬鹿馬鹿」

今度は自分の頭をグーで力いっぱい叩き始め、涙目になっている。全く状況が分からん。

「とりあえず、自分を責めるのはそこまでにして、いろいろと説明してくれると此方としてはありがたいです」

「は、はい。今すぐ簡潔にしっかりと完璧に誰にでも理解できるように説明します！」

顔を至近距離まで近づけ、すごい剣幕をされ、思わず身を引いてしまう。

「お、お手柔らかにお願いします」

その後、また謝罪祭り始める少女を宥めて話を聞くと、どうやら俺は目の前の天使と名乗る女の子のミスで死んでしまったらしい。

話を聞いた時、他人から聞いたせいとか、死んだという実感はあまり湧かなかった。目が覚めたら此処にいたし、意識ない時に死んだから恐怖とかなかったからだろう。

けど、どうやら向こうとしては予定外の死人だったみたいで、俺にはまだ寿命がかなり残っている。それで、お詫びに余生を違う世界で過ごさせてくれるサービスをしたい、と。簡単にまとめるとこんな感じか。

「新しい人生は魔法を使えたり、頭を良くしたりと優遇しておきますね。大丈夫、今度はミスしませんから、安心してください」

「はあ、ありがとうございます」

力瘤を見せ、妙に張り切る天使っ娘に若干の不安を感じる。この元気があって、明るい性格。もしかして、この娘ドジっ子属性持ちなのだろうか。

だ、だとしたら、さっきのはフラグかもしれない。

「それではいきますよー！」、と天使っ娘が右手を高々と宙に上げる。

「ちょ、ちょっと待っ

」

全部言い終わる前に、ものすごい眠気が襲いかかってきて、どんどん視界がぼやけてくる。どうかフラグじゃありませんように、と祈りつつ、俺にはもう睡眠を求める本能に身を任せるしかできなかった。

「ああああああ、性別を間違えてしまいました！！」

『ミッドチルダ式は、現在ではもっとも使い手の多い魔法体系であり、遠近両方を取り揃えたオールラウンド系である。基本的には射撃魔法、砲撃魔法、近接魔法、防御魔法、捕獲系魔法、結界魔法、補助魔法、移動魔法など多彩な』

本の表紙に走らせていた目を止める。これはもう知っている知識だ。長年読み込まれてきたのだろう、角や表紙が擦れて疲れている『初心者用魔法体系書（ミッド式）』と書かれた本をゆっくり閉じる。そして、それを机の上に並べられた多々ある本の隙間に戻す。退屈だ。最近は何の魔法書を読んでも知っていることしか書いていないから、読む本がなくなってしまった。

だから、そろそろ実践に移りたいのだが、大人たちが「危険だからやめなさい」、と言って許してくれない。

やることなく手持ち無沙汰になってしまったため、机に突っ伏しですでに癖になりつつある自分の長い黒髪を指で弄び始める。さら

さら指を転がる感触がとても心地良い。

考えてみると、前世では此処まで髪を伸ばしたことはなかった。今と違い、周りから何も言われなかったし、伸ばす必要もなかったから遠慮なく床屋などでバツサリ切っていた。「そんなに綺麗な髪だからもつたいない」やら「長いほうが似合ってる」などと言われても、ちつとも嬉しくない。「普通」の女の子なら顔を綻ばせて喜ぶだろうが、私は違う。前世が男なのだ。

そのことに気付いたのは3歳くらいだったか。誕生日の日に前世の記憶を取り戻し、最初は上手く転生できたことを喜んだ。だが、それもその日の風呂に入るまでだった。男としてあるべきものがなく、喜びのあまり気がつかなかったが男にしては長すぎる髪とまつ毛、それにきりつと凜凜しいつり目。つまり、女として生まれ変わっていた。

大分慣れはしたが、あの頃は本当にいろいろと大変だった。女という事実を受け入れるのにも時間がかかった。スカートを履くのにもかなり抵抗があった。

ふう、思い出したくもない……。今も「口調が男の子みたいだから直しなさい」とか「女の子らしい遊びをしなさい」など周りから言われるが、そのくらいいいだろう。

だって、一人称を俺から私にしたのだ。ここまで譲歩したんだ、口調や生活スタイルまでは譲らなくても良いだろう。

「おい、シーナいるかい？」

「ん、ユーノか。入っていいぞ」

声のしたテントの入り口の方へ体を向けると、同い年で幼馴染であるユーノが入ってきた。肩までかかる金髪と整った顔立ちが女の子を思わせるが、ユーノの性別は男だ。

幼いながらも将来を期待させる顔と、今年6歳ですでに歴史学やら

魔法学の論文を読むことができるほどの頭脳を持っている。私も物理学や魔法学の論文を漁って読んでいたりする。最近、二人で魔法学の論文を読んで、それに対するお互いの見解を交換したりもしている。なので、ユーノと私は周りからは天才児だ天才児だと持て囃されていたりする。

この体の頭脳が前よりも良いというのもあるが、私は前世の記憶持ちだから論文などを理解できるのは当たり前だ。だが、ユーノは前世の記憶持ちでもないのに俺と同じことしているというのだからすごい。ユーノすごいよ、ユーノ。

そんなことを思っていると、ユーノが此方へ優しく微笑み、口を開く。

「族長が呼んでたよ。今すぐ来いってさ」

「族長が？」

「うん、僕も呼ばれてるから一緒にと思ってさ」

「ユーノもか。分かった、今すぐ行く」

年季が入った、所々朽ちているウッドチェアから腰を上げ、ユーノの方へ向かう。しかし、族長に呼ばれるような心当たりが全くない。まあ、行けば分かるだろう。

私が住んでいるスクライア一族は、遺跡発掘などでロストロギアと呼ばれる太古の超文明の遺産を掘り出して、それを管理局に保護と

いう形で買い取ってもらうことで収入を得ている。

だが、発掘してもほとんどのロストログアが壊れているか、すでに盗掘された後で、完全なものが見つかることはほとんどない。

だから、次元世界を渡り歩き、遺跡を数多く掘って見つかるしかない、発掘という根気のいる作業の効率を少しでも上げるために、スクライアの人ほとんどがこの発掘作業に従事している。言うなれば、数多の次元世界を股に掛けるトレジャーハンター一族ってところだ。あとの特徴は、一族に血の繋がりを持つ者が少ないってことだろう。次元移動を頻繁に行うため、戦争中の世界やら退廃した世界で孤児を拾うことが多く、気が優しいスクライアの人々はその子たちを拾って育てたりしている。私とユーノもその口らしく、二人とも親の顔も見ることがない。最初は、親がいないことに憤りを感じてはいたが、その境遇のお陰で、私とユーノは仲良くなれたので、今では少し感謝している。

スクライアの族長は、部族会議で候補者を選び、多数決で決まる。発掘一族のため、次に行く世界を決めたりする決断力と発掘における指揮能力が必要とされ、代々の族長はその代の優秀な人物が選出される。

ちなみに今の族長は、白髪と白髭もさもさの好々爺で、一族みんなに好かれている。

「族長、ユーノです。シーナを連れてきました」

ユーノが自分の身長の上の倍以上ある入り口で大声を上げる。族長のテントは普通のテントよりかなり大きく、中で部族会議が行えるようになってる。

(二人とも来たか。入りなさい)

族長の少し低めの声が、頭の中に直接響いて来る。これは念話と呼

ばれる魔法の一種で、リンカーコアと呼ばれる魔法を使うための器官を持つ人にしか使えない。スクライアは大部族なため、リンカーコアを持つ人はこの念話で相手を見つけたたり、会話をする方が楽なのだ。

勿論、リンカーコアを持つ子供も、何かあった時すぐに大人を呼べるように、と5歳になると念話を教えてもらう。だが、他の魔法は10歳にならないと危険だから、と教えてはもらえない。

「失礼します」と二人で声を合わせて入り口をくぐると、大きめの暖炉を挟んで胡坐をかいている族長がいた。

「ほら、そんなところに突っ立ってないで、こっちに来て座りなさい」

そう手招きされ、ユーノと顔を見合わせ、指示に従う。ふかふかと柔らかい羊毛系の絨毯に腰を下ろし、正座で族長の方を向く。

「ほう、スカートを履いておるのか。シーナも少しは女の子らしくなったかのう？」

「そんなことないですよ、族長。シーナの中身はまだまだ男の子です」

「族長もユーノも酷いな。こんな美少女、次元世界中を探してもなかなかいないぞ」

「外見だけならね」

そう言って、二人は声を上げて笑い始める。女の子らしいと言われるのは癪だが、男らしいと言われてもからかわれているようで嬉しくない。眉間に皺を寄せ、顔を顰めると二人は面白がって、さらに

笑い続ける。もう、本当にその辺でやめてくれ。

「ふおっふおっふおっ。シーナもからかわれなくなったら、次までにもう少し女の子らしくしてくることじゃな」

「私が女の子らしくしたら、どうせ『シーナには似合わない』って言うって笑うでしょう」

「違うのう」

首を上下に振り、妙に納得顔する族長。族長は、会うたびにこうやって私をからかってくる。これが軽いスキンシップだと分かっているものの、からかわれる方はあんまり良い気分ではない。やめて欲しいとも少しは思う。

まあ、私に直す気がないからこのやり取りはこれからも続いていくだろう。少し疲れた。ふう、とため息を吐き、少し凝った眉間に右手を添え解す。

「いやいや、これはすまんすまん。機嫌を直してくれると嬉しいんじゃないかな」

「知りません」

少し怒気を込めて言うが、本気ではないのが分かるのだろう。「これは手厳しいのう」と軽口を返される。

「それで、僕たちに用って何ですか？」

「おお、そうじゃった。すっかり忘れておったわ」

ユーノの問いに、族長は手を叩いて事を思い出す。

「お前たちに話があつてな。ミッドチルダの魔法学院に通つてみないかのう?」

思わず、「ええ!？」とユーノと声を合わせて驚く。ミッドチルダといえは次元世界の中心で、最新の魔法技術が溢れる世界。それに次元世界を束ねる時空管理局の本部も存在し、まさに魔法が中心で世界が回っていると言っても過言ではない。

なので、ミッドの魔法学院で学ぶということは最新の魔法に触れるということだ。横を見ると、ユーノも目を輝かせている。答えは決まっているじゃないか。

「是非、行かせてください!!」と二人で声を合わせ、真剣な顔で族長に詰め寄る。

「そ、そうか。分かつた分かつた」

嬉しさのあまり、立ち上がってユーノとハイタッチを交わす。

話を詳しく聞くと、私たちの能力が高いので、『独学で魔法を行使し始める前に、専門的に魔法を教えた方が良いんじゃないか。そして、どうせだつたらミッドの魔法学院で学ばせて、一族の繁栄に尽力してもらおう』、ということが部族会議で決まつたらしい。一族の未来を託されて少し気が重いが、やっと実践で魔法を学べるからそれも苦にはならない。

ただ、ミッドの学校はかなりレベルが高く、入学しても卒業できない子が多くいるらしい。私はきちんと卒業できるだろうか。前世では学校で苦勞した記憶しかない。不安だ。

どうやら入学は9月で、それまであと2カ月ある。そうだ、入学してから困らないようにさらに勉強しなくては。そうと決まつたら、善は急げだ。

入口へと方向転換し、勢いよく外に出ると、私は自宅に向けて全力

疾走した。

「お前たちは、魔法学の論文読めるくらいじゃ、勉強は全然大丈夫に決まっとる。実際の行使法を学ぶ機会だと思って気楽に行ってください。って、なんじゃもうおらんのか……」

第2話

左急旋回、下降、上昇と絶え間なく空を舞い、迫りくる赤色の閃光を回避する。それに合わせて、緑色のゴムで結われた幼い頃から変わらないポニーテールと、身につけているスクライアのマントが私の背中で激しく揺れ動く。

そんなダンスの中、冷静に周りを確認すれば、私の周りには大量の赤色の魔力スフィアが常に私を撃墜せしめようと睨みを利かせている。それらが一発でも直撃すれば、非殺傷設定とはいえただでは済まないだろう。しかし、なんとかこの状況を脱したいものの、攻撃を避けるのが精いっぱい反撃の糸口を探すことすらできない。

よし、少し強引だが反撃に移ることを決意。上昇運動から身体を素早く空中反転させ、急速降下開始。速度を上げ、後ろから迫るしつこい追手を振り切ると、地面から少し浮いた位置で、実技教官が魔力弾を周囲に展開している姿を確認。

『Photon Bullet』

単調な機械音が金色に輝く右手の腕輪から発せられ、肩くらいの高さには灰色の拳程度の小さな魔力スフィアが2基形成される。そして、間髪入れずに「ファイアー！」と開かれた右手を前方に差し出し、灰色の光弾が相手へと放たれる。

フォトンバレットは初歩の射撃魔法だが、私のは少し工夫がされており、普通より魔力を喰う代わりに高いバリア貫通能力と攻撃速度を獲得している特別製だ。

空を駆け、高速を有する灰色の閃光が目標へ狂いなく吸い込まれていく。攻撃が無事放たれたことを確認すると、結果を見定めるため降下行動を止め、空中で静止する。

流石の教官も、私のこの強引な反撃に少し反応が遅れたのか、それ

は高速移動魔法で避けられることなく着弾。次の瞬間、直撃を示す爆発音が室内に響き渡り、細かい土を含んだ土煙が巻き上がる。それと同じくして周りの学生たちからは歓声上がるが、私はまだ気を抜かない。矢継ぎ早にデバイスから魔法を選択し、展開する。

『Photon Bullet Gatling Shift』

先ほどとは違い、私の前方には通常より少し大きめの灰色の魔力スフィアが10基展開される。

この魔法は、1基のスフィアから毎秒10発の斉射を10秒間続けることで、単発の威力は下がるが合計1000発のフォトンバレットを相手に叩きこむ、私の持つ中でも一番の大技。避けられれば致命的な隙をつくるが、相手の足が止まっている今はその心配はない。おそらくこれを使えば残存の魔力量のほとんどを消費し、戦闘続行は不可能になるだろうが、私が勝つには今しかない。迷いや躊躇いはない。

「これで決める。フォトンバレット、ガトリングシフト！フルオートショット！」

右手を勇ましく振りかざすと同時に、大気を裂く轟音をあげ高速連射が始まる。1秒、2秒、3秒と進むにつれ、残りの魔力量はそれに反比例しどんどん減っていく。着弾地点は土煙が段々と辺りを覆い始め、最早目視で状況を確認することは不可能。

大魔法の行使で、疲労の蓄積も増え、身体が重く感じ、呼吸も乱れるが歯を食いしばって耐える。そして、漸く最後の1秒まで打ち終える。大量の土煙が視界を遮り、確認こそできないが勝負は決まっただろう。

もう、空を飛んでいるのもつらい。だが、終わった。この最後の模擬戦は私の勝ちだ。初めて教官に勝った！天高く右手を上げガッツ

ポーズし、喜びを全身で表現する。

見学していた他の生徒も大きな拍手と歓声で私を祝福してくれている。「よくやったぞ、男女」、「流石シーナ！俺たちにはできないことを平然とやってのけるっ！そこに痺れる、憧れるうううう！！」やら「シーナ様素敵！結婚してください！」、「抱いて！私を抱いてください！」などという勝手なことを言われているが、疲れすぎて今は気にする余裕がない。力を振り絞って無理やり笑顔をつくり、ひらひらと手を振り返す。

この動作に観衆のボルテージもさらに上がる。中には服を脱ぎだしたり、失神する生徒まで出てきたりと、カオスなことになっている。はは、あの光景を見ているとさらに疲れるな。取りあえず、今は早くシャワーを浴びてベッドで休みたい。この後にやりたいことを考えながら、ゆっくり降下を始める。

「爪が甘いぞ、シーナ・スクライア」

『Straight Buster』

静まり返っていた煙の中から教官の声とデバイス音が聞こえ、こちらを振り向くと赤い砲撃魔法が猛スピードで眼前に迫ってきていた。咄嗟にシールドを張ろうとするが、疲労のあまり身体が動かない。駄目だ、間に合わない。諦めを感じ、呆然とすると視界が一面赤に染まる。魔力攻撃による衝撃を全身に受け、意識が根こそぎ刈り取られていく。

そして薄れゆく意識で、晴れた土煙の中心に凜と立つ、破損が酷い教員用バリアジャケットを展開している教官が、こちらに杖を向けているのを微かに見る。嗚呼、私は負けてしまったんだ

混濁していた意識が澄んできたのを感じ、鉛のように重たい瞼を少しずつ開いていく。完全に開き、映りこんできた景色はおそらく医務室の天井だろう。天井しか見ていないが、薬や消毒の独特の匂いが鼻をくすぐるのが、それを証明してくれる。上半身を起こそうと試みるがまったく反応がない。どうやら身体は魔力疲労と魔力ダメージにより最悪なコンディションで、動くのには一苦労しそうだ。

「あ、シーナ。良かった、気がついたんだね」

そんな声に、ふと顔を横に向けるとユーノがこちらを覗きこんでいた。

「丁度いい、ユーノ。身体を起こすのを手伝ってくれないか？」

「何言ってるんだ。模擬戦で身体が疲れているんだから、まだ寝ての方が良いよ」

「お願いだ。少しだけだから、な」

「しょうがないな。少しだけだよ」と子供の我儘を聞く父親のように、ユーノが私の背中を支えて起してくれる。

私の今の服はスクライアの民族衣装ではなく白いローブで、いつもゴムで結っている髪も今は解かれている。右手首にあるはずのデバイスもなく、ベッドの横の棚を見ると丁寧に置かれた私のシャツとスカートとマント、その上にストレージバイスのアイギスが置いてあった。

スクライアの衣装は上は男女共通で、下は素材は共通だが男はズボ

ン、女はスカートと分かれている。機能性を追求しており、濡れてもすぐ乾き、動きやすくできているので私のお気に入りだ。
アイギスは私とユーノが自作で組み上げたストレージデバイスで、射撃魔法は得意だけど防御魔法や捕獲系魔法が苦手な私のためにそれらを補うようにつくられている。おまけに変身魔法でフェレットになった時に、自動的に大きさが調節されフェレットの小さな足にも対応する優れたものだ。

「そうだ、シーナ。実技教官がシーナのことをべた褒めしていたよ。『手加減していたとはいえ、A A + ランクの俺をここまで追い詰めるとはなかなかだ。間違いなく、シーナ・スクライアは空戦Aランクレベルはあるだろう。俺が認めよう。だが、これで満足せず、さらに精進を続けるように』ってさ」

これは夢だろうか。厳しくて、人を滅多に褒めないことで有名な鬼教官が私を認めてくれた。これはすごく嬉しいことだ。

だが、心の底では悔しいとも思ってしまう。教官は初歩魔法しか使っていないが、対する私は全力を出し尽くして負けてしまった。相手の誘導弾で攻めの機会を失い、攻撃をしても此方の射撃魔法は防御魔法で防がれてしまう。最後の攻防も教官が油断してくれたからできたチャンスだし、そしてそれを決められなかったのは私の力不足だ。

これは私の戦闘スタイルに原因がある。私の戦闘スタイルはヒット&アウェイが基本だ。飛行魔法で相手を翻弄し、隙を見て射撃魔法で攻めていく。決め手に欠けるスタイルだと良く言われるが、これは私の魔力資質が制御能力と変換効率に優れるが、瞬間最大出力が低いというものなので仕方がないことだ。魔力量もAランクと決して低くはない。だが、いくら貯水量があつたとしても、水が出る蛇口が小さかったらそこから水が少しずつしか出ない。

資質が原因で、私は魔力放出が重要な防御魔法と砲撃魔法が苦手だ。

代わりに射撃魔法は誘導制御型と直射型どちらも得意なので、ユーノと相談した結果、今のスタイルを誕生した。
まあ、とはいえ教官に褒められるくらいに成長したんだ。これで少しは胸を張ってスクライアに帰れるだろう。

「ふふ、シーナ嬉しそうだね」

「な、なんでそんなことが分かるんだ」

「いつも生真面目な仏頂面だけど、今は口元が緩んでる。長年一緒に居るんだ、それくらいで分かるよ」

なんで、そのくらいでこっちの感情が分かるんだ。感情を隠すつもりはなかったが、面と向かって嬉しそうだと言われると、何か恥ずかしいものを感じる。言い知れない恥ずかしさで身体が段々熱を持ってきて、布団で中で両手をもじもじとしてしまう。

ユーノはそんな真つ赤になった私を見て、微笑ましそうに笑い始める。此方も負けじと非難の眼差しを向けるが、なんの効果もない。く、屈辱だ。

そうして、しばらくこの恥辱に耐えていると、ユーノも疲れたのか笑うのをやめ、真剣な表情でこちらになおる。

「ねえ、シーナ。僕らがここに来てもうすぐ3年だ。で、飛び級を重ねてついに今年卒業。僕は卒業したらスクライアに戻るつもりだけど、シーナはどうするの？」

「どうするって……。私も勿論スクライアに戻るつもりだ」

「それでいいの？スクライアに戻ったら、遺跡発掘に追われる日々になるんだよ？」

一体、ユーノは何が言いたい？魔法学院に入ったのはスクライアに貢献するためで、今までその目標に向かって頑張って学んできたんじゃないか。それなのに何で今更『どうするんだ』なんて聞く。

「僕が言いたいののはね、シーナ。自分のしたいことをしなくていいのよ、ってことだよ。僕は、攻撃魔法に才能がなくて補助系統の魔法しか使えないけど、シーナは違う。射撃魔法が得意で空戦Aランク相当の実力を持っている。管理局に入れば、間違いなくエリートコースだ。それに、頭も良いんだから魔法学院の先生にだってなれる。望めば何にだってなれるんだ。それなのに、流されるようにスクライアに戻るだなんてもったいないよ」

ユーノの放つ一言一言が私の胸をきつく締め付ける。咎めるような視線を向けられ、思わず目を逸らしてしまう。

私だって、ユーノの言ったことを考えたことがなかったわけではない。だが、スクライアは発掘で成り立っているとはいえ、その収入は決して安定したものではない。

スクライアには高ランク魔道士の数がほとんどおらず、遺跡に潜む魔獣や機械兵が原因で、発掘が思うように進まないことだって多くある。それに遺跡のトラップも魔法関係が多く、魔道士でなければ危険なことがほとんどだ。

私は今までスクライアのみんなの役に立つために頑張ってきたんだ。そんな私が、この力をスクライアの人々以外の誰に使えばいいというのだ？

「スクライアに戻ってからもいいから考えてみてよ。『自分が本当は何をしたいか』ってことをね」

そう言うとユーノは少しづつが悪そうな顔で静かにドアを開け、出

て行ってしまった。

一人部屋に取り残された私は、身体を襲う激しい疲労と胸のしこりをどうしようかと考える。暇つぶしにアイギスに入っている本でも読もうかと思っただが、あまり集中できないだろう。

そうしているいると考えているうちに、疲労からくる強烈な睡魔が襲ってきた。「しようがない、寝るか」と誰にとも分らない眩気をし、布団へ潜る。どうかいい夢が見れますように、と願って目を瞑る。

部屋の中の静寂が自分を非難しているようで、妙に耳に痛かった。

第3話（前書き）

ユーノがジュエルシート輸送船に乗っている、と原作と違う点があります。

文章を修正しました。見直しが不十分で、本当にすいません。

第3話

私以外の人がいないテントで、「ああ、めんどくさい」と独り言を呟きながら、『ジュエルシード発掘報告書』とコンソール上に映されているデータの完成を進める。

出来ることなら、本当に最低限の内容で済ませたいのだが、この報告書は管理局に提出するものなので、手を抜くことが出来ない。心から、あの発掘現場に居合わせていたことを後悔する。

この間発掘した『ジュエルシード』と呼ばれるロストログア、聞いた話によると次元干渉型エネルギー結晶体と呼ばれる危険物らしく、最悪の場合次元振を発生させることもあり得るそうだ。

そんなものを発掘してしまったため、管理局のロストログアを専門に扱う遺失物管理班から「発掘場所の詳細、発掘時の状態とその後 の取り扱い方の詳細を教えて欲しい」と言われ、現在に至る。

もう少しで書き終わるとはいえ、作業を始めてからすでに2時間が経っており、いい加減にキーボードを叩くことに嫌気がさしてきた。私にこんな退屈な仕事を押し付けた原因のジュエルシードは、今頃ユーノと一緒に本局に到着したくらいか。実に忌々しい。あんな厄介なもの、見つからなければ良かったのに。

「よし、終わった。後はこれを添付して送信するだけか」

両手を頭上で組み合わせ、席上で背伸びして筋肉を伸ばす。重労働が終わり、漸く一息つける。さてさて、メール送るのは後にして、気分転換にシャワーでも浴びてきますか。

しっかりとデータが保存されたのを確認して、終了を選択してコンソールを閉じる。

「シシシ、シーナ大変だ。ユーノが、ユーノが！」

急に背後から大声を出され、驚きで身体を少し震わせる。駆け込んできた青年に目を向けると、走って来たのか、大きく肩で息をしている。

「そ、そんなに慌ててどうしたんだ？」

「これが慌てずにいられるか。さっき届いた情報で、数日前にユーノが乗った次元航行船が原因不明の事故に逢って、ジュエルシードが第97管理外世界地球の海鳴というところにはら撒かれたらしい」

「事故！？それでユーノは大丈夫なのか？」

「無事には無事らしいのだが、『ジュエルシードを回収しないと』と言って、一人で管理外世界に行ったそうだ」

話を聞いて、責任感の強いユーノらしいなと感心する。だが、古い文献にあったジュエルシードの特性が事実ならば、それはとても危険な行為だ。

記述に由ると、ジュエルシードは不完全な願望器であり、生物の願いを歪な形で発現し周りに甚大な被害を及ぼす物質だ。生物と融合、無機物を生物化など無茶苦茶なことが可能。

一度発動したジュエルシードを元に戻すためには封印魔法を行使するしかないのだが、封印魔法は魔力の消費が激しい。私とユーノの魔力量では完璧な封印魔法を何度も使うことは難しく、使えて1回しかも、ジュエルシードが暴走している場合、封印魔法の行使まで持っていくまでに魔力を浪費し、完全に封印できるかは怪しい。

一応、ユーノは遺跡で見つけた高性能なインテリジェントデバイスであるレイジングハートを持っているが、あれは性能が高すぎて

私とユーノには手に余る代物だ。

それらを考慮すると、最悪の場合ユーノは

「すまないが、コンソール内にある報告書を転送しておいてくれ」

そう言って、壁に掛けてあるマントを取り、急ぎ足で外へと向かう。

「お、おい、どこへ行くつもりだ」

「決まっている。ユーノのところだ」

「決まっているって……。いいから落ち着け。ジュエルシードとユーノのことは管理局に任せるのが一番だ。第一、族長がこんなこと許す訳ないだろう」

彼の言うとおり、族長が私の行動を許可するはずがない。私の身も危険に晒される可能性があるからだ。

しかし、次元空間航行艦船は足が遅く、管理局が現場に到着するのは早くても数週間以内。それまでユーノが安全だという保障はない。管理局を待っていては遅いのだ。

幸い、地球なら前世住んでいたこともあり、勝手は分かる。海鳴という土地は聞いたことないが、ユーノの転送魔法の術式をコピーしている私は、地名を入力するだけで直接そこへ転移出来る。何も問題はない。

「族長には『勝手をすまない』と伝えてくれ」

「待て、早まるな」と背後から聞こえる声を無視し、外に出て右手首にある待機状態のアイギスを起動。待機状態と形は変わらないが、『All right』という反応で起動を確認。即座に座標を入

力して次元転移魔法を発動。

距離が長いため、いくつかの世界を経由することになり時間も魔力も消費するが仕方ない。見慣れた灰色のミッド式魔法陣が足元に浮かび、次の瞬間、私は次元の海を渡っていた。

最後の転移が終わり、周りは緑一色の林の中。空は気持ちが良いくらいに晴天で、時刻はまだ昼間のようだ。誰にも見られないように転移先を林にしておいたが、辺りには人影がなく安心する。よし、早速ユーノを探すことにしよう。

「っと、待てよ。さすがにこの格好でうるつくのは不味いな」

現在、私が着ているのはスクライアの民族衣装。魔法が認知されている世界なら怪しまれない格好だが、ここは魔法が存在しない管理外世界だ。どうしたものかと考えていると、一つ名案が浮かぶ。

それはフェレットに変身すること。転移魔法で魔力を大量に消費している今、これ以上余分な魔力を使いたくない。フェレットモードは魔力消費を抑えられ、食欲も通常のフェレットと同じになるため食料の確保も楽になるから最適だ。

アイギスから変身魔法を検索して発動。目の前が灰色の光に包まれ、段々と身体が縮小し獣に近づいていく。光が消えたので手足を見ると、白と黒の縞模様が特徴の毛が生えたそれに変わっている。視点も低くなっている。今の私は、誰が見ても白黒模様のフェレットだろう。

「今度こそ行動開始だ」

不可視魔法をかけたサーチャーを一つ先行させ、まずは林を出ようと走り始める。一定の速度で進み続け、マルチタスクでサーチャーからの情報を処理。いつここを抜けられるかと考えていると、サーチャーが神社らしき建物を発見。

続けて、目を複数持つ全身黒の異形の獣、赤い宝石のついた杖と白いバリアジャケットらしき格好をした少女の光景が送られてくる。おそらく、獣の方はジュエルシールドが犬か猫を取り込んで暴走した姿だろう。

だが、少女の方はなんだ？サーチャーからは、明らかに尋常じゃない魔力反応を感じる。地球には魔法が存在しなかったはずなのに、おかしい。

そう考えていると、野獣が鳥居の上から少女を強襲。しかし、その攻撃は届くことなく少女の防御魔法で防がれる。プロテクションと野獣の激しい拮抗は少女の勝ちに終わり、獣は遠くへと弾かれる。そして、聞き覚えのある声が少女に封印魔法を促し、ピンク色の魔力光が難なくジュエルシールドの封印。少女の詳細は分からないが、私の探し人は間違いなく彼女と一緒にいる。

速度を上げて林を駆け抜け、神社に突入。予想通り、バリアジャケットを解除した少女の近くに、クリーム色をしたフェレットがいる心配させて、と思う。だが、同時に安堵もする。

「ユーノ！」と声をかけ、彼女たちに近づく。

「ええ！？ユーノくん以外の喋るフェレットさん！？」

「シ、シーナ！？どうしてここに！？」

まずは、驚いている二人から事情を聴くでしょう。

「　　というわけなんだ。それで、シーナはなんでここに？」

夕暮れで茜色に染まっている神社の階段で1人と2匹での話し合い。お互いの自己紹介を済ませた後で、事情を説明しあう。ジュエルシードを1つ封印したのはいいけど、魔力不足と怪我のせいで動けなくなつて、少女　なのはに手伝いを頼んだという情けない幼馴染が私に聞いてくる。

「お前を助けるためだ、バカたれ」

「そうだったんだ。心配かけてごめん。でも、シーナが来てくれて助かったよ。これで、なのはを危険な目に遭わせずに済みそうだ」

ユーノは安心した様子でそう言うが、隣で聞いていたなのはの表情が少し暗くなる。どこか寂しそうで、悲しそうで、縋り付くようなそんな顔。多分、彼女は私たちに協力したいのだろう。

私もユーノと同じで、出来ることなら人に頼りたくはない。だけど、悲しいことに、あまり言いたくないのだが

「その……実際に言いにくいんだがな、ユーノ。助けに来たと大口叩いたが、私の魔力もここまで来るのに大分減っていてな。うん、なんだ。つまり、な」

「つまり？」

「現状ではあまり役に立てそうにない」

「えー！ー！！！」と、まるであり得ないものを見るような目でこちらを見るユーノ。仕方ないじゃないか。スクライアの里からここまでかなりの距離があるんだから。一方、なのはは表情を明るくさせ、期待に満ちた目でこちらを見つめてくる。

「というわけで、もう少しの間手伝ってくれと助かる」

「もちろんなの！」と快い返事を貰い、当分の目途は立った。此方としてはなのはの魔力は助かるし、何より彼女が協力を申し出てくれているのだ。

なのはは希望を叶えられ、私たちはジュエルシードを早く効率よく集められ、相互にメリットがある。ここは協力するのが一番だろう。それに、もし本当に危なくなったら、彼女を置いていけばいいだけだ。ユーノも最初は渋っていたものの、念話でそのことを告げると納得してくれた。話し合いが終わり、気がつくと思影がうっすらとし、陽が落ちかけていた。

「もうすぐ夜か。では、私は寢床を探しに行くからまた明日会おう」林の方へ踵を返し、走り出そうとする私に「え？シーナちゃんも家に来ればいいの」と当たり前のように言うのは。それに対して、「いや、ユーノがいるし、これ以上迷惑をかけるのは……」と断る。

「うちの家族はみんな優しいから大丈夫だよ？」

そう満面の笑みで言われ、微妙に話がかみ合っていないのを感じる。しかし、結局なのはに押し切られ、「それじゃあ」と好意に甘えることに。野宿せずに済みそうだ。良かった。

その後はいろいろと大変だった。高町家まで徒歩で向かっている際、少女とフェレット2匹が並んで歩いている奇妙な光景に、周りからは暖かい視線を向けられた。

高町家では、なのは姉に「なのはがもう1匹フェレットを連れてきた」と驚かれ、「シーナちゃんは女の子なのね。かわいいわー」となのは母に頬ずりされ撫で回され、「この子も賢いのか?」となのは父にはお手をさせられた。

そうして揉みくちやにされ、ぐったりしているところをなのは兄に救出された時は、本当に感謝した。

後日きちんとお礼をしよう、と私は固く心に誓うのだった。

第4話

雀が元気よく一日の始まりを告げ、朝の日差しが差し込む高町家のリビング。おなかの虫を刺激する良い香りをさせながら、手慣れた動きで朝食をつくるのは母。桃子さんの鼻歌が聞こえる。

なのは父、土郎さんは自身が監督する少年サッカーチームの試合のため早めに家を出、兄の恭也さんは恋人の忍さんとデートらしくこちらにも朝早く家を出て行った。

なので、現在この家にいるのは桃子さん、姉の美由紀、なのは、ユーノ、私の3人と2匹だ。

「シーナもユーノと一緒に毛並みが良いね。ふわふわして気持ち良すぎるよー」

そう言いながらソファーに座る美由紀は私を膝の上に乗せ、首筋、背中と優しく撫でてくれている。

高町家でフェレットとして暮らし始めて1週間、フェレットも悪くないかもしれない。最初は撫でられるのも嫌だったが今ではあ、そこ良いかも

「きゅー」

「ふふ、そんなに喜んで。シーナ気持ち良いのかー？」

「んー、お姉ちゃん、お母さんおはよー」

「あ、おはよー、なのは」

なのはに挨拶をするために、美由紀が手を止める。まだ触られてい

た感覚が微かに残っている。少し名残惜しいが声のした方へと視線を向ける。

まだ眠そうな目を左手でこすりながら、右肩にユーノを乗せたなのはが階段から下りてきていた。

(シーナ、聞こえる?)

(ん、何だ?)

(今日はなのはが疲れていることだし、ジュエルシード探しは休みにしようかと思っっているんだけど)

(そうだな。一週間で5つも集めたんだ。十分すぎるくらいのパースだろう。なのはの体調も心配だし、今日は休みでいいんじゃないか?)

そうしてユーノとの念話を終わらせると、「こら、ユーノとシーナは何、見つめ合ってるの?」と美由紀が口を尖らせ不満を漏らす。何か怪しまれたかと思い、咄嗟に「きゅきゅー?」と首を傾げて誤魔化する。

だが、すでに美由紀は私のことなど目に入っておらず、「私だって彼氏の一人くらい居れば」と一人ぶつぶつと恨みがましそうにぼやいていた。

客観的に見ても美由紀は十分すぎるくらい美人なのだから、彼氏の一人や二人すぐできるだろうに……。

「何ナーバスになっているの? ほら美由紀、ご飯出来たわよ!」

食卓に視線を移すとなのはがもう食べ始めていた。テーブルの下でユーノもビスケットに齧りついている。私も朝ごはんはまだだった。

足早にユーノの近くに駆け寄って隣に置いてある皿からビスケットを口にする。うん、甘くて美味しい。

「そういえば、なのは今日アリサちゃんとすずかちゃんとサッカーを見に行くのよね？」

桃子さんの問いに、「うん、そうだよ。ユーノくとシーナちゃんも一緒だよ」となのはが答える。

話に聞いてはいたが、なのはの友達に会うのは初めてだ。ユーノも、助けてもらったときに会ったがその時は気を失っていて、ちゃんと顔見せするのはこれが初めてらしい。会うのが楽しみだ。

河川敷を拓いて造られたグラウンドで、それぞれのチームのユニフォームを着けた選手たちが一つのボールを追いかけている。

プロがするそれとは違い小学生のサッカーはポジションなどあまり関係なく、皆でボールに群がるものになりがちである。だが、この両チームは各ポジションごとに其々が自分の役割を果たそうと動いているのが分かる。

そう感心していると、翠屋JFCの選手がセンターリングを上げ、それをフォワードがダイレクトでゴールに叩きこむ。これで2点目か。

「きゃー、やったやった!!」

「ア、アリサちゃん落ち着いて」

「じゃははは」

試合を見て熱くなり、のっていた膝の主が動き出す。え、ちょっと急に足元が動き振り落とされそうになり、落ちないように必死にスカートをしがみつく。

「アリサちゃん、シーナちゃんが落ちちゃっよ」

「え？あ、ごめんね、シーナ」

アリサは私の存在を思い出したようで、ベンチに座り直してくれる。漸く足元が安定したことで、踏ん張っていた力を抜く。つ、疲れた。これで2度目だ。点が入る度に振り落とされそうになっている。それをさすががアリサに注意してくれ、私は救われている。

すずか、ありがとう。これで落ち着いてサッカーに集中できる。そう思って、私が意識をピッチに向けると同時に終了のホイッスル。

「なのはのお父さんのチーム強かったわね。2対0で完封よ」

「うん、本当だね。凄かったよ」

「そうかな。えへへへ」

父親のチームを褒められ頬を緩めるのは。

確かに、アリサやすずかの言うとおり凄かった。小学生であれだけの試合が出来るチームはなかなかない。

やはり、指導者が良いからだろうか。うん、と悩んでいるとふと頭に重さを感じ、毛並みを崩さないように優しく撫でつけられる。悪くない。

私の頭を撫でながら、「この後はどうする？」とアリサが聞く。

「うちのお店でお昼ご飯食べない？お父さんがご馳走してくれるって」

「うーん、私はお言葉に甘えようかな。アリサちゃんはどつするの？」

「私もそうさせてもらっわ。翠屋さんのご飯もケーキも美味しいしそれじゃあ、となのはが立ち上がり、私を肩に乗せたアリサとすずかも続く。どうやら、昼ごはんは楽しくなりそうだ。」

(ユーノ、そっちはどうなっている?)

人々の悲鳴や助けを求める声がする大通りの端をすり抜けるように進む。ビルが立ち並ぶ近代的な街並みに不釣り合いなほどの大樹。ジュエルシードによって具現化され、今も少しずつ成長を続けている。早くなんとかしなければ被害が増えるばかりだ。だが、このくらいの規模になるとコアとなっているジュエルシードを探すことは困難。喫茶店でアリサとすずかと分かれた後、私は士郎さんと風呂に入っていたため出るのに時間を食ってしまった。そのためなのはとユーノに先行してもらい現在は別行動中。とりあえず合流しなければ。

(僕たちはビルの屋上にいるよ。で、なのはが今広域探查魔法を展開しているところ)

(そうか、すぐにそちらに行く)

なのは魔法の才能は凄い。レイジングハートの助けがあるとはいえ、魔法を初めて1週間程度でもう広域探査魔法を使えるとは……。私とユーノが毎日少しずつ基礎を教えてはいるが、探査魔法はまだ教えていないぞ。彼女は一体どれ程の才能があるのだろうか。射撃魔法以外に才能がない私からすると、少し羨ましく思う。いや、今はそんなことを考えている場合じゃないな。

「だ、誰か」

人通りがない裏道を使い近道をしようとする。その時大通りで逃げ惑う人で騒がしい中、微かに聞こえた声。動物の聴覚は人より良いため聞こえた小さな声。

足を止め、急ぎサーチャーを一つ展開。辺りの光景を探ると大樹の根がこちらに伸びてきている。いや、待て。その先に車椅子の少女が車道の端で転倒している。逃げる人に弾き飛ばされたのか。このままではまずい、と衝動に駆られマルチタスクで変身魔法を解くのと同時に高速移動魔法ブリッツアクションを使用。

迫る脅威に、「ひい」と少女が身を竦める。間に合え、と願いめいっばい手を伸ばす。そして間一髪少女に手が届き、そのままの勢いで車道を抱きかかえ転がる。危なかった。

「大丈夫か？怪我はないか？」

腕の中で縮こまる少女がゆっくりと顔を上げる。その顔は恐怖が張り付き、目は涙で溢れていた。

一瞬の間が空き、自分が助かったと気付くと安堵の表情を浮かべる。見たところ歳は私と同じくらいか。茶髪のショートカットが似合い

顔立ちも良い。

「あ、あの、助けに来てくれてほんまありがとございます」

どうやら思わず見つめ過ぎていたようだ。私の視線に気恥ずかしそうに少女が感謝を述べる。

それに対して「いや、無事なら良かった」と返し、立ち上がり後方の車椅子を確認。車輪は外れフレームも曲がり無残な状態で乗れたものではない。

「どうやら車椅子を壊してしまったようだ。すまない」

地面に腰を落ち着けている少女に頭を下げる。

「謝ることはないです。車椅子が壊れたのは貴女のせいやないですし、それに車椅子はまた買えばええですから」

そう笑ってくれる少女。どうやら性格も良さそうだ。ふう、前世でこんな娘と出会いたかった。

しかし、少女はこう言ってくれているが車椅子を救えなかったのは心苦しい。よし、お詫びに少女をおぶって家まで送るとしよう。強化魔法を使えば問題ないしな。

私の提案に「ええです。助けてもらうたのにそこまでしてもらわんでも」と断る少女の声を無視し、背中におぶる。

大樹を見ると本体がうっすらとし始め、根も続いて消え始めていた。どうやら封印に成功したようだ。

一応なのはとユーノに連絡を入れるか、とマルチタスクで考えつつ少女の指示に従い歩き出す。日が暮れ始めており、空は茜色に染まっていた。

ジュエルシードの影響で陥没したり隆起して荒れている道を他愛のない会話をしつつ進む。

途中、少女　はやてに「重くないか？疲れていないか？」などと聞かれたが、強化魔法で筋力を上げているため重さはほとんど感じていないため、疲れは全くない。

「そういえばシーナちゃんの格好って変わつとるね。名前も『椎奈』じゃなくて『シーナ』やる。顔立ちも私と少し違うし、もしかして外人さん？」

「え、ああ。最近こっちに來たばかりでな。この服も故郷の衣装なんだ」

「へー、そうなんや」と納得するはやて。急いでいて気がつかなくったが私の今の格好はスクライアの衣装だ。

うっかりしていた。今更変えようとしても無理だし、はやても信じてくれたからこのままでいいか。と、考えているうちにはやての家に着いたようだ。

表札には『八神』とあり、はやての教えてくれた特徴と一致する。

「おおきに。ありがとうな、シーナちゃん」

「なに大したことはしてないさ」

「そんなことあらへんって。シーナちゃんは私の命の恩人や」

命の恩人か。言われて嬉しい言葉だ。こんな私でも人の役に立てた、と少し誇る気持ちが生まれる。

「そっや！シーナちゃん、うちで夕飯食べていかへん？」

「それははやての親御さんに迷惑がかかるだろう。遠慮させてもらっよ」

私の言葉に横目から見えるはやての顔が若干曇る。

「家に親はおらんよ。だから、安心して。私こっ見えて料理得意なんよ」

明るい言葉の中に混じる悲しそうな感情。もしかしてこの子も両親がいないのだろうか。だとしたら、一軒家にはやて一人が住んでいるということか。いや、日本でそんな異常な事態が起きるはずはない。

浮かんだ考えを頭から消し八神家の門をくぐる。鍵を開けてもらい中に入るときちゃんと掃除が行き届いている様子。やはり考えすぎか。

その後、予備の車椅子に乗ったはやてが料理をつくるのを待ち、二人で楽しく食事をした。そしてゲームやらお喋りをし、二人でお風呂に入った。

風呂でははやてがいきなり私の胸を揉んできて大変だった。「私と同じ年やから、さすがにあるはずないか」と妙に悟った顔で捨て台詞まで吐かれた。けど同じ年の子とはしゃいだのは私も久しぶりで、

とても楽しかった。

その日は流れでお泊りまですることになり、なのはにそのことを伝えたと了承をもらえた。お喋りをしながら一緒の布団で寝て、次の朝は一緒に起きた。

朝ごはんまでもらい、その後はこれから学校があるからと断り高町家に帰ることに。別れ際にはやてがまた来てくれと言ってくれ、平日は図書館にいたことが多いと教えてくれた。必ずまた会おう、と約束して帰宅。

思い出すと、はやての家で若干だが魔力を感じた気がするが、私の使った変身魔法や高速移動魔法で出た残留魔力だろう。

第5話（前書き）

1話から4話までの改行を行いました。

第5話

まるで遊び相手を見つけたかのような狩人の目。相手の視線が私を射抜き、私もまた相手に睨みをきかせる。息がとまるほどの緊張感。おそらく先に視線を逸らした方が負ける。自然と芝生を掴む四肢に力が入る。

ここまで隙がなく、手強い敵は初めてだ。一瞬の気の緩みも許されず、時間だけがただ流れていく。

そしてついに相手がこの均衡に耐えられなくなったのか、踵を返し向こうに行ってしまう。よし、勝った。

「シーナはずかの家猫と一体何をしているの？」

「さ、さあ？」

不思議そうな顔をするアリサに、戸惑いを見せるずか。

（シーナちゃん、何してたの？）

（何って、命を懸けた戦いだ。まあ、戦いは私の勝ちで終わった）

（にやはははは。そ、そうなんだ）

なのはまで微妙な表情をしている。残念だ。この戦いの凄さが分からないとは。ほら見る、なのはの膝上にいるユーノは凄いものを見る目で私を見ている。自然界の掟、食うか食われるかの弱肉強食の世界は恐ろしいんだぞ。

私が今いる月村邸。なのはがずかにお茶会に誘われて来た。そして入ってびっくり、豪華絢爛の大豪邸で猫屋敷だった。

フレット姿である私とユーノにとって猫は倍以上の体躯と力を持ち脅威となる。魔法が使えれば大したことないのだが、アリサやすずかの手前ではそれもできない。残るは純粋な野生の勝負。我ながらよく勝てたものだ。

最近ではジュエルシードもなのは魔法の上達のお陰で、労せず封印できています。なのは飛行魔法も使えるようになった。私とユーノが飛べるようになるのに1カ月かかったというのに。それも驚異的早さらしいのだが、なのはそれ以上だ。本当に天才だ。ん？この反応はまさか。

(ユーノ、なのは)

(うん、こっちも感じた)

(こっちもだよ。でもどうする？アリサちゃんとすずかちゃんがいるし……)

なんとか発動前に封印したいところだ。けど抜け出すにしてもどうすれば

(そうだ)

そう言うとユーノはなのはの膝から下り、ジュエルシードの反応があった林の方へ走って行く。そういうことが。

(なのは)

(うん)

なのはも理解したようだ。なら私はユーノの後を追うか。

ジュエルシードの影響で大きくなった猫が地に横たわり、上空ではなのはと黒いバリアジャケットで身を包んだ金髪の少女が戦闘を行っている。黒い少女の機動力はかなりのもので、先ほどからののはは先手を取られてばかりだ。

(あの黒い魔道士強いな)

(うん、対魔道士戦の経験がない今のなのはじゃ)

(勝ち目はないな。そして、この場に来たということは彼女の目的は高確率でジュエルシードだろうな)

(僕もそう思う。どう？シーナは勝てそう？)

(無理だろうな。見たところ向こうはまだ余力を残している感じがする。まあ、とりあえずやってみるさ)

ユーノとの念話を切り視線を変えると、二人は地上でお互い魔法を展開して対峙していた。だが、その均衡も一瞬で破られる。

なのはが猫に気を取られた隙を逃さず、電気を纏った射撃魔法がなのはに命中。地を抉る轟音と土煙が上がり、気を失ったなのはが宙に舞い上がる。それをユーノが急ぎ落下地点まで行き衝撃吸収魔法で救出。なのはが無事だったことに安堵しつつ黒い少女に目を向けると、大魔力を使つての封印魔法を行使している最中だった。

少女がデバイスを振りかざし天から雷の槍が降り注ぐ。続いて地を

這う一撃で魔法は完成し、封印されたジュエルシードが出てくる。少女はジュエルシードをデバイスにしまうとその場から去ろうとする。

ここで逃がしたらいけない。ブリッツアクションを使い少女の進路上に移動し、道を遮る。

「悪いが少し話を聞かせてもらいたい。何故ジュエルシードを集める？」

「フェレット？あの子の使い魔か。悪いけど話しても意味はないから」

「そうか。ならここは通せないな」

そう言う少女の目つきが険しくなる。だが、こちらとしても譲れないものがある。斧型と思われるデバイスを構え、こちらを窺う彼女。私もスフィアを2基展開して準備は出来た。

「シュート！」

高機動魔術師に先手を取られるのは愚策。スフィアからフォトンバレットを放ち先制攻撃。だが、攻撃先にすでに姿はなく空振りに終わる。おそらく相手の戦闘スタイルは高機動を活かし死角からの一撃で相手を倒すタイプだろう。なら、と急いでブリッツアクションで離脱。後方を確認すると、予想通り少女は私の後ろに回り込み魔法刃でつくられた鎌を振るう姿が見える。間一髪といったところか私の戦闘スタイルと似通うところがあり対策は立てやすいが、相手の力量が此方より高いのでそれも通用するかどうか。一か八かやってみるか。

再び睨みあう形になる。いつもの力技で危険だが背に腹は代えられ

ない。

「うおおおおお」

覚悟を決めると相手へと無謀とも言える突撃を敢行する。最初からトップスピードで速度を緩めることなく突進。相手は私の行動に驚きを見せるがすぐに迎撃の態勢に移る。

『Photon Lancer』とデバイス音が聞こえ3基の電撃を放つスフィアが形成される。綺麗に無駄なくつくられた光球は遠目からでもかなりの魔法だと分かる。あれから繰り出される威力を考えると若干怖気づきたくなる。

「ファイア！」

少女がデバイスを振りかざすと同時に迫りくる射撃魔法。速度もかなりのものでこのスピードで避けるのはかなり難しい。

「ぶっ」

エルロン・ロールと呼ばれる空中戦闘機動 直進しつつ右方向へロールする技を使い1つ目の攻撃をギリギリで回避。背中に掠ったのか、全身が静電気で逆立っている。気にせずに2発目も同じ動きで避ける。

だが、3発目は直撃コースで避けようがない。当たる直前でアイギスに助けてもらい留めておいたフォトンバレットを発射。灰色の光弾と黄色の光弾がぶつかり合い爆発。

視界が煙に覆い尽くされ何も見えなくなる。ここまでは作戦通り。即座に変身魔法を解き、右拳を振りかぶる。そして、煙を抜けると此方を見て目を丸くさせ無防備な少女の姿が映る。

この勝負は油断させて一撃を与えれば私の勝ち。どんなに速くても

高速移動魔法を展開する暇を与えなければ避けようがない。それにこの手の魔道士は防御に難があることが多いため、一撃でも決まれば決着は着く。

「もらった！」

魔力を込めた拳を対象へと振りぬく。身体強化された一撃は静寂を切り裂き少女の腹部へ一直線し、そのまま空を切った。

『Blitz Action』

音のする上方を向くと無傷の少女がいる。あのタイミングで避けられるとは思わなかった。おそらく黒いインテリジェントデバイスが主を助けたのだろう。大切そうに抱える漆黒の紳士はどこか誇らしげに映る。

「ありがとうバルディッシュ」

『Yes sir.』

「うん、いくよ」

ぎゅっ、と抱きしめていたデバイスを私にかざし詠唱が始まる。

咄嗟に逃げ場を探すがもう遅い。耐えるしかない。アイギスをつけた右腕を前方に押し出し防御魔法を最大出力で展開する準備。

「撃ち抜け、轟雷」

『Thunder Smasher』

放たれた遠距離砲撃魔法はなののディバインバスターに勝るとも劣らない威力。だが、耐えてみせる。

『Round Shield』

魔力放出が苦手な私でもアイギスの力があればある程度のもは防御できる。

眼前に出された円形の盾が私を守るべく彼女の攻撃と衝突を始める。視界は砲撃で埋め尽くされ凄まじい衝撃が身体中を襲い、盾から分散した砲撃が私の後ろを通過していく。

彼女の砲撃は正しく『雷』と呼ぶべきもので、最初の衝撃は防げたが完全に出来るかは怪しい。

「ッ！」

嫌な音を立て僅かながらシールドに走る亀裂。こうなったら残りの魔力をフルに使いシールドを強化するしかない。

アイギスに命令を下し、魔力を受けたシールドは一層の厚みを増す。くう、と声が漏れるがシールドはそれ以上ひび割れることなく安定した。

漸く攻撃が止み上空を見るが黒い魔道士はもういなくなっていた。

外はすっかりと更け、夜の世界になっている。ピンクを基調とした可愛らしい部屋で私たちは今日の出来事について話し合っている。

「あの杖や衣装や魔法の使い方 多分、ううん間違いなく僕たち

の世界の住人だ」

ユーノの言うとおりあの娘は管理世界の魔道士だろう。ミッド式の魔法陣も確認できたし間違いない。

「うん」と弱く呟くなのは。悲しそうなその顔に見ている私たちの気分も沈んでしまう。

「ジュエルシード集めをしていると、あの子とまた……ぶつかっちゃうのかな……？」

相手の目的もジュエルシードである限りそれは避けられないだろう。出来るなら話し合いの末相手には手を引いてもらいたいが、多分無理だ。強靱な意志を感じたし、手を引く程のことなら初めから危険なジュエルシード集めなんかしない。

次の日から、私たちは対魔道士戦の練習を始めることになった。私たちも今回の件で教える必要があると感じ、それになのはの希望があったからだ。

まずは空中での三次元機動と空間把握を教えることになり、レイジングハートを使ったシュミレーションを中心として進めていった。ここでなのはの高い空間把握能力が発揮され、資質から戦闘スタイルを確立していくことになる。

私たちとしてはなのはを戦わせることはしたくないのだが、彼女の意志が固く揺るがないのだ。

願わくはなのはが危険な目に遭いませんように。

第6話（前書き）

更新が遅いですね、申し訳ありません。出来るだけ頑張ってみます。
シーナがはやての親のことを気にしないのはリーゼたちの認識障害
結界が働いてるからです。
確かそんな設定があつたはず……。

第6話

「あたしたちの最優先事項はジュエルシードの捕獲だよ」

橙色の体躯をした狼の使い魔が言い放つ。

その一言で我に還った黒い魔道士、フェイトがジュエルシードに向け動く。相手の行動に一瞬呆然としたが、なのはも負けじと後を追う。

二人の魔道士がデバイスを構え、ジュエルシードを中心に交錯。だが、ジュエルシードはどちらのデバイスに収納されることなく不気味に光を放つ。

光と共に私の身体をジュエルシードによる衝撃波が襲う。

咄嗟に体勢を低くし何とかやり過ごそうと試みる。衝撃はすぐ収まり、顔を上げると暴走状態のジュエルシードがある。

「なのは!!」

衝撃を間近で受けその場にいないのはを探す。

「だ、大丈夫だよ」

飛ばされたのか、少し離れた位置になのが立っていた。

バリアジャケットに目立った損傷はなく、外傷もなさそうだ。だが、握られたレイジングハートは亀裂が走り欠けている。

一先ず無事なことに安堵しつつフェイトに視線を向ける。彼女はデバイスを持たずジュエルシードに突撃している。

まさか素手で押さえ込むつもりなのか？未だ膨大な魔力を周囲に撒き散らすジュエルシードに近づき優しく包むのを見る。

どうやら私の勘は当たったようだ。

「……止まれ。止まれ止まれ止まれ」

両足を地につけジュエルシールドを包んだ姿は神に祈る修道女を連想させる。

そんな彼女の手からは血が出、額には汗が滲んでいる。

「止まれ止まれ止まれ止まれ止まれ」

フェイトは出血が酷くなっても行為を続ける。請うように、願うように悲痛な声が響く。

今すぐに止めさせたいが目の前の迫力に身体が動かない。なのはとユーノも私と同じで動けずにいる。

見守っているとフェイトの手から漏れる光が段々弱まっていく。最後には彼女の手によりジュエルシールドが完全に封印された。

「フェイト!!」

無理をして意識を失った主を橙色の使い魔が急いで人間体になり抱える。

「」

きつ、とこちらに敵意ある眼差しをし何かを言おうとしたが、使い魔はそのまま高く飛び上がるとビルの間隙に消えていった。

ネオンが眩しく、黒いスーツの同じような服装の人で溢れかえる街

中。

すれ違う人々は元の姿に戻った私を一瞥するが黙って行ってしまふ。変身魔法で服を変えておいて正解だったようだ。

Tシャツとハーフデニムにお決まりのポニーテールという風貌は周りに問題なく溶け込んでいる。一瞥される理由は小学生くらいの子が歩き回る時間ではないからだろう。

夕食後、「ジュエルシード探しをしてくる」と出てきたから時間が遅いのは仕方ない。気を付けていれば大丈夫だな。まあ、こんな街中で何か起こることもないだろうが。

「フェイト……か」

思わず口から出た言葉。

同じ年くらいなのに私より魔法が上手で意志が強い女の子。橙色の狼の使い魔を従えた子。

先週の温泉旅行の時、なのはとユーノは二人に遭遇したらしい。私は美由紀に捕まっていたため合流できず、着いたのは全てが終わった後だった。

フェイトはジュエルシードを欲している。おそらく誰かに命令されて集めているのだろうが、その人物の目的が分からない。

あれは人間が扱うには危険すぎるものだ。最悪、使い方を間違えれば世界が滅ぶこともあり得る。ジュエルシードで一体何をすることもりだ？

「情報が足りないか」

ベンチを見つげ腰掛ける。心地よい夜風が吹き抜け髪がなびく。気温は春らしく穏やかだ。

フェイトは強い。今の私だとまず勝ち目はないだろう。

使い魔も主人の力量に比例するためなかなかのレベルだった。先程

もユーノと二人で戦って、こちらが押ししていたとはいえ膠着状態で終わった。

「強くないとな」

これからのことを考えると今より強くならなくてはいけない。

現在、私は初期魔法を中心にしている。だが、そろそろもう少しランクが上の魔法を使うべきだろう。

この前の戦闘で決定打に欠くことがはつきりとしたからだ。

最大出力が問題で必殺技が難しいなら通常攻撃の底上げが課題か。

どんな魔法が良いかは後でユーノと相談しよう。

っと、いけない。

いつの間にか考え事をしていたようだ。よし、もう少しジュエルシード探しをしたら帰るとするか。

落ち着けていた腰を上げ立ち上がる。

さて、どこから探すか。

「シーナちゃん？」

「ん、はやてか」

右側を向くと車椅子に乗ったはやてとそれを押す若い女性がいた。

「こんばんは。はやてちゃんのお友達かな？」

「うん、そうや。シーナちゃんって言うんよ」

「はじめまして、シーナ・スクライアです。えーと」

「私は石田幸恵って言います」

「石田先生は私の主治医してくれててな、優しくて頭が良くて、さらに綺麗で完璧超人なんやで？」

「もう、はやてちゃんたら」

はやての言葉に石田先生は顔を綻ばせている。

どうやら仲がとても良いみたいだ。患者と先生でこれほど距離が近いのは珍しいだろう。

「私たちは帰る途中やけど、シーナちゃんは何してたん？」

「私か？……散歩だ」

「なんか変な間があったような気がするな……。まあ、ええか。シーナちゃん、良かったら途中まで一緒に帰らん？もう夜遅いから一人歩きは危ないよ」

これからジュエルシード搜索をしようと思ったがどうしようか。今日の戦闘でレイジングハートは大ダメージを受け修復中、なのはとユーノも疲れている。私も少し身体が怠い。

とりあえず場所だけは把握しておこうと搜索に出たが広域探査魔法を使わなければ見つかりそうもない。

よし、

「では、そうさせてもらおうよ」

「決まりや」

ほんなら、と手を差し出すはやて。これは握れということか？

前世でも手を繋いで歩いたのは親くらいだな。少し気恥ずかしいが折角だ。

右手を出し握り返すと、子ども特有の柔らかく温かい感触を感じた。

真ん中で分けられたテレビ画面の右側で、赤い帽子を被り青いつなぎを着た中年の男性がカートに乗りスタートの合図を待っている。左側にはバイクに乗ってエンジンを今か今かとふかせている緑色の恐竜。シグナルが一つ、また一つと点灯しスタート。

同時に左側にいる私のキャラクターがスタートダッシュを決め先頭集団を維持する。

はやても同じくスタートダッシュに成功しており私のすぐ後ろにっている。

このコースの概要はすでに知っているからミスさえしなければ上位は固い。

ドリフトを駆使しカーブを最短距離で曲がり、ジャンプ台でのアクションも忘れない。

現在の順位は一位、妨害に備え後ろには緑甲羅を展開している。対するはやはり二位でこのままなら私の勝ちだ。

最後のカーブを曲がり、残すは直線のみ。この勝負もらった

「こ、このタイミングで青甲羅だと!?!」

突如として画面内に現れた青い悪魔は私のカートに直撃。無惨にもカートは宙に舞い最悪のタイムロス。

「もらったで!?!」

地面に叩きつけられている私の横を緑の弾丸が通過する。それを見、急いで体勢を建て直し急発進するが後続の一台にも抜かれゴールイン。

今のレースの結果が表示され点数が加算される。そして、これは最後のレースだったので総合順位も決まる。

期待して結果を見るが私の総合順位には二位の文字。

「一点差で負けた……」

「ふふふ、私の勝ちや！さて、どんなお願いしようかなー」

横を見れば、はやてがニヤニヤと悪魔のような笑みを浮かべている。これまで私の全勝で、持ち主のはやてを涙目にさせていた。

が、「何か景品が無いとやる気が出ない」とはやてが言い、それならと『負けた方が勝った方の言うことを何でも一つ聞く』ということに。

そして最終レースまでお互いに譲らず良い勝負を展開。最終レースも私が二位以上なら総合で勝ったのだがまさかの三着。あそこで青甲羅さえ来なければ……。

「せやな、今日お泊まりする、ってのはどうや？」

「え、本当にそれでいいのか？」

「駄目やるか？」

もつとすごい無理難題がくると思ったがこのくらいなら余裕だ。

いや、寧ろ喜んで泊まるう。はやてと居るのは楽しいし、はやてのつくるご飯も美味しいしな。

「私は全然構わないぞ」

「ホンマか!？」

「ああ」

私の言葉にはやては表情を明るくさせる。余程嬉しかったのだろう。

「なら、早速お風呂入ろうか」

「それはいいのだがな……」

その何かを鷲掴みにして揉むような両手は何だ？
とてつもなく嫌な予感がするぞ。

「うん、ばつちりや。これでシーナちゃんの将来も安泰やな」

「もうお嫁にいけない……」

前世は男だし、いく気はないのだが。

「そんなら私が貰ったるわ」

「いやそれは……」

「遠慮せんでもええよ。私が養つたる」

「はやて……」

不覚にもキュンとしてしまった。

第7話

切っ掛けは私の「クロノ執務官、私と模擬戦していただけませんか」という一言だった。

絶対に却下されるだろうな、と思っていたのだがリンディ提督が「そうね、なのはさんの実力は映像から大体は把握しているけどシーナさんはまだだったわね。いいでしょう、模擬戦を認めます」と了承。

予想外の返答に驚いたがこれはチャンスだ。

聞けばクロノ執務官は足りない魔力量を技術で補っている技巧派とのこと。さらに魔導士ランクはAAA+でアースラの切り札。

事実、先の戦闘でフェイトに手傷を負わせた射撃魔法はかなり完成されたものだった。

私の戦闘スタイル上、優れた技巧派魔導士との模擬戦は戦闘や魔法の良い勉強になる。

なので少しでも何かを吸収しなければ。

『二人とも準備はいい?』

アースラ内のトレーニングルームで向かい合う私とクロノ執務官。その間に通信主任であるエイミィさんが映った画面が現れる。

「こちらはいつでも大丈夫だ」

「私もいけます」

『実力を見るための模擬戦だから怪我しないように気を付けてね』

「はい」

「分かっているさ」

そう言うと、バリアジャケットを纏ったクロノ執務官は手に持ったS2Uと呼ばれるデバイスを握る力を強める。

私もスクライアの衣装に透明なバリアジャケットを展開し、右手のアイギスと共に準備万端。

フェレットから人間に戻ったのは久しぶりだが、身体捌きは多分問題ないだろう。最初から全力でいこう。

『それじゃあ模擬戦開始!!!』

先手必勝。抜き打ちでフォトンバレットを発射しつつ床を勢いよく蹴り後方へ飛ぶ。

高速展開と高い制御能力は私の長所だ。抜き打ちなら誰にも負けな
い自信がある。

そしてフォトンバレットは構成が簡単なこともあり、選択から展開
までに必要な時間は約一秒。初見でこれを避けるのは至難の業だろ
う。

灰色の光弾は瞬く間に驚くクロノ執務官に命中。爆発の後、煙が巻
き上がる。

それを見、油断することなく反撃に備え空中で身構え、その場に制
止する。

『Stinger Ray』

魔法名を告げる女性の声が聞こえ、煙から青い魔力弾が飛び出して
くる。

速度はかなりのものだが、距離が離れていたので上昇して簡単に回
避。

急いで出所を確認すると、そこには無傷の執務官がいる。

「これで決まるとは思ってたんですけど……無傷ですか」

「いや、実際はギリギリさ。あと少し防御が遅れていたら危なかった。抜き打ちにしては威力があつたからね」

マズイ、初撃を防がれた。

正攻法で勝てる相手ではないから、不意打ちで主導権を握ろうとしたが失敗したみたいだ。

いや落ち着け、まだ手はあるはずだ。

「今度はこちらの番だ」

『Stinger Snipe』

こちらへと向けられた杖先から魔力弾が放たれる。弾速は速いが、これなら先程と同じ要領で避けられる。

『Blitz Action』

高速移動魔法で執務官の側面に移動し、そのまま反撃の態勢に入る。執務官を見据え狙いを定める。

待て、何かおかしい。執務官に動きがない。

嫌な予感がし魔力弾の行く先を見ると、それは壁に当たることなく綺麗な弧を描きこちらへと襲い掛かってくる。

ッ、誘導弾だったか。

直撃を避けるためにトップスピードで空を駆ける。

旋回を幾度かした後、後方を見ると未だ離されることなく追跡されている。

こうなったら相殺するしかない。

『Divine Shooter』

なのは用に作成された術式で少々使いにくいだが、今回は細かい操作が必要ではないから問題ない。三人で作成した時にデータを残しておいて良かった。

「シュート!!」

打ち出した三つのデイバインシューターで青い誘導弾を迎撃。

一つ目は簡単に打ち破られるが、二つ目との衝突で威力と速度は大分落ちた。

これなら三つ目で止められる。

マルチタスクで最後のデイバインシューターを操作し誘導弾へ向かわせる。

「甘いッ!」

クロノ執務官の一言で誘導弾はデイバインシューターを回避し、螺旋を描きながら上昇する。

「スナイプショットツ!!」

螺旋運動の軌道から外れ、勢いを回復した誘導弾がさらに加速してこちらに来る。

ヤバイと思い、残ったデイバインシューターが誘導弾の進行方向を塞ぐがあっさり破られる。

私の防御魔法で防ぎ切れるか?

『Round Shield』

間一髪、差し出した右手から魔力盾が出現し誘導弾が着弾。目の前で爆煙が発生し一時視界を遮られる。

高いバリア貫通効果があつたらしくシールドが突破される直前だったが、なんとか防げた。

防御魔法補助に特化したアイギスがなければ危なかった。

『Blaze Cannon』

「ツツ!!」

私の姿は煙で隠れているはずなのに休む暇なく攻撃が放たれた事を示すデバイス音が響く。

攻撃が何処から来るか分からない。急かされるようにブリツツアクションで上昇し煙を抜ける。

「蒼窮を駆ける白銀の翼、疾れ風の剣」

「しまった」

『Delayed Bind』

左右から魔法陣が現れ、青色の鎖が私の四肢を拘束し磔状態にされる。

どうやら炙り出されたみたいだ……な。

クロノ執務官がこちらに杖を突き付ける。

このバインドを外すのには時間がかかりそうだし、少しでも動きを見せたら魔力弾が来る。もう打つ手はない。

『はい、そこまでです。この模擬戦はクロノ執務官の勝ちとします』
目の前にディスプレイが出現し、リンディ提督が終わりを告げた。
バインドが解かれ身体が自由になり、脱力感に襲われる。
結局、一方的にやられてしまった。何も出来ずにやられてしまった。
実力差があつたとはいえ悔しいものは悔しい。

『シーナさんが“強い”ということはよく分かりました』

「いや私は……」

『シーナさん、“強さ”とは魔法が強いことだけかしら？確かにそれも“強さ”の一つね。でも考えて戦える、というのも“強さ”に入るんじゃないかしら？貴方はそれを持っている、と私は思います』

「考えて？」

『そう、常に冷静に状況判断し、適切な決断で無駄な犠牲を出さない。戦力を正確に把握し、勝てるように策を考える。指揮官に欠かせない重要な能力よ』

そんなこと一度も考えたことなかった。自分は戦いにおける重要な要素が分かっていなかったのか。“強さ”とはずっと魔法が強いことだと思っていた。

『今はまだ意識して出来ていないわけではないけど、それも大丈夫でしょう。ね、クロノ執務官』

「え、どうということですか？」

意味深な発言をし、クロノ執務官に意味ありげな微笑みをするリン
ディ提督。

「か、艦長。まあ、これから何が起こるか分からないからな。戦力
増強しておくに越したことはない。それに君も伸び悩んでいるみた
いだし良い機会だろう」

「それは……魔法を教えて下さるといことですか？」

「そういうことになるな」

頬が紅潮し、気恥ずかしそうに顔を背けるクロノ執務官。
まさか執務官から直接魔法を習えるなんて……。

「よろしく願います、師匠」

姿勢を直し、深々と頭を下げる。

これからは師匠と弟子の関係になるのだから礼儀はきちんとしなけ
れば。

『あらあら、頑張らなきゃね。クロノ執務官』

『クロノ君にもついに弟子が出来たんだねー。頑張ってね、お師匠
様』

「エイミィ、からかうのは止せ。艦長もやめてください。ほら、君
も頭を上げるんだ」

向こう側からは楽しい声が聞こえ、師匠の慌てる声も聞こえる。

「一生懸命頑張らなければ」と心の中で思い、右手で小さくガッツ
ポーズ。

私が「はい、師匠！」と顔を上げると、向こう側ではまた一笑いきるのだった。

戦艦の食堂と聞くと、もっと汚れているイメージがあった。だが、アースラの食堂はそれとは全くの逆で清潔感溢れる空間だ。それに料理も美味しく種類も豊富。

次元航行船は一度航海に出れば最低でも数ヶ月は陸に上がることが出来ない。

戦艦内のため娯楽と呼べるものは存在せず、唯一の楽しみといえば食事くらいしかない。

実際、食堂にいる人たちは笑顔で食事している。食事は軍隊の士気に関わる問題だというのは本当のことなのだ実感。

テーブルに置いてある皿からクッキーを一枚手に取り口に運ぶ。さくつと歯触りが良くバター風味が広がる。

ここの食事も美味しいが高町家とはやてのつくるご飯が恋しい。まだアースラに来て二日しか経っていないというのに……。

しかし、なのはの両親が家を離れることを許可するとは思わなかった。

かわいい子には旅をさせる、とは言うがなのははまだ九歳。確かに九歳の割にしつかりしていると思うが、それでも子供には変わりない。両親は不安だろうに、我が子の意思を優先したのか。

ん、そういえば時空管理局の提督相手に「戦力として自由に使ってくれて構わない」と交渉を持ちかけたユーノも九歳だったな。

改めて見ると私の周りは大人びている友達が多いな。もしかしたら、前世も合わせればそれなりの歳になる私よりも大人なんじゃ……。

うん、もう考えるのはやめよう。

「シーナちゃん、落ち込んでいるところ悪いけど前いいかな？」

不意に声をかけられ、視線を上げるとトレーを持ったエイミーさんがいた。

「あ、はい」

「んじゃ、失礼するね」

そう言うと私の対面に腰掛けるエイミーさん。トレーにのっていたのはアイスティーで、座って直ぐに慣れたようにストローを手にし一口飲む。

「いやー、さっきの模擬戦すごかったねー」

「そう……ですか？」

「そうだよー、クロノ君相手にあそこまで出来れば十分だよ。大体の人が開始一分もたないからね」

「そうなんですか？」

「うん、最近だと武装隊の隊長さんが一番長かったね。確か二分くらいだったかなー？」

武装隊の隊長の平均魔導士ランクはAだったか。

Aランクなら管理局内でも実力者とされるのにそれを二分。いくら何でも強すぎるだろう……。……。

「だから自信を持っていいって。それに、ああ見えてクロノ君教えるの上手だから今よりもっと強くなれるよー」

「ふふ、そうですね。どうせなら師匠を倒せるくらいに強くなりませう」

「うんうん、その意気その意気」

悩んでいた自分が馬鹿らしい。

うん、今勝てなければ頑張って練習して次勝てばいいんだ。

「よし、良い顔になったね。女の子はそうやって笑っているのが一番だよ」

「私もですか？」

「もちろん。男の子は女の子の笑顔に弱いんだよ」

「でも私、狙ってる子なんかいませんよ」

「えー、ユーノ君は違うの？幼なじみなんですよ？」

「そうですね、ユーノはそんなんじゃないわ。うーん、気の合う親友って感じですかね」

それに私は身体は女でも心は男。男と付き合う気は全くない。まあ、かといって、女の子が好きなのではないが。

とにかく、今は結婚とか付き合う気は全くない。

今後どうなるかは、魂は身体に引っ張られるというから分からない

が……。

「そうなんだ、残念」

「ユーノも私よりなのはみたいなのの方が好みですよ、きっと」

「なのはちゃんかわいいからねー。クロノ君もなのはちゃんみたいなのがタイプだし……なのはちゃん人気だね」

「本当ですね。それじゃあ賭けしません？ユーノと師匠、どっちがなのはに先に告白するか」

「お、いいねー。私はクロノ君に賭けるよ。あ、でもクロノ君奥手だからなー」

「なら私がユーノですね。実はユーノも奥手なんですよ」

「こりゃ長い勝負になりそうだ。賞品は負けた方がミッドチルダグランドホテルのケーキバイキングを奢るってのはどう？」

「文句ないです」

魔法学校在学中に一度あそこのケーキバイキングに行ったけど、評判通りの美味しさで感動したなー。すごく高かったけど……。もう一度行きたいと思ってたし、丁度いい。

「決まり！！楽しみだなー、あそこのケーキ美味しいからね」

「あ、分かります。特にチーズケーキが」

「そうそう、あとタルトも」

「いいですよ、ね、あね。食べたくなってきたな」

「本当だねー」

ユイノ、お願いだから勝ってくれ。私のケーキのために！

第7話（後書き）

そろそろシーナを勝たせてやりたいけど、原作キャラが強すぎて難しい。

勝つとしたらもう少し先になるかもしれないです。

第8話

ジュエルシード搜索から十日目、最近は空振りが続いたが漸く当たりを引いたみたいだ。

ブリッジ内の大型スクリーンに映し出されているのはエネルギー放出によって荒れ狂う海とそれに振り回されているフェイト。

六個のジュエルシードを一度に封印しようと無茶な強制発動をさせたらしく、災厄と呼べるような光景が広がっている。

魔導士一人でこの惨状を治めるのは間違いない不可能、リンディ提督や師匠の言うとおりフェイトが力尽きるのは時間の問題だろう。

師匠たちは封印で疲弊したフェイトを捕らえる作戦でいくらしい。確かに相手が弱ったところで叩くのは最善の策。だけどそれに納得出来ない私がいる。情が移ったのではない。戦いを通じてフェイトのことを知り、他人とは思えなくなった自分がいるのだ。

先程のやり取り、そして横にいる幼なじみの顔を見るとどうやらなのはとユーノも同じ気持ちのようだ。

（なのは、フェイトを助けたいんだろう？なら行ってやるといい。ユーノ）

（分かってる。僕が結界内まで安全に転送する）

（シーナちゃん、ユーノ君……）

（自分が正しいと思ったら迷うな。後悔しないように突き進め）

（ うん！！ ）

なのはの良い所は他人を想う優しい心とそれを支える不屈の意思。

それらは子ども全員が持っているものではなく、なのはだから持っている大切なもの。

なのは私たちのことを友達と言ってくれた。なら私はそれに応えて友達が迷っている今こそ手を貸し、正しい道を進めるように助けてたい。

決意を固めたなのはが師匠の「おい、何を」という声を退け転送ポートに入る。

「すみません。高町なのは、命令を無視して勝手な行動をとります」
師匠たちを遮るためにユーノとなのはの前に立つ。そしてユーノが高速で術式を組み上げる。

「あの子の結界内に……転送！」

背後で魔法の光が煌めく。しかしほんの一瞬で光は消え転送完了。

「シーナ、僕たちも！」

「ああ」

続いて私たちも足速に転送ポートに入る。

「君たちは……自分たちが何をしているのか分かっているのか!？」

「師匠、本当にすみません。帰ったらどんな罰でも受けますから」

「座標軸固定、いくよ」

魔力光が身体を包み、足先から自分が消えていくような転移魔法独

特の感触が広がる。

咎める顔の師匠と予想してたばかりの笑みを張り付けたリンディ提督を最後、意識と身体は地球の成層圏へ。

そして刹那、全身で風を受け、加速しながら自由落下が始まる。

「アイギス、セットアップ!!」

マントを纏いバリアジャケットを展開し、肌寒い気温をシャットアウトする。

どす黒く不気味な雲を抜け、遠目からなのはたちの姿が見えた。

むう、画面越しでも凄まじかったが実際に現場に来てみると空気が冷たく張り詰めているのを感じる。全てを砕く竜巻と全てを呑み込む津波、動物的本能が危険と警鐘している。

今は結界が張られて付近に影響は出ていないが、これは早くどうにかしないと危ないな。

とはいえ私の使える魔法ではこの場を鎮めることは出来そうにない。情けないが封印はなのはたちに任せて私は封印完了までの時間稼ぎをしますか。

この場合、出来る限り魔力を練り上げた強固なバインドによる捕縛がいいな。

術式の選択終了、目を閉じ左手を対象に向け集中。足下に魔方陣の展開を確認、準備完了。

はあ、バインドはあまり得意ではないんだがな、っと

「縛れ、チェーンバインド!!」

魔方陣から灰色の鎖が伸び、瞬時に六つの竜巻を縛り上げる。

だが捕縛された竜巻は少しの間動きを止めるもののすぐに勢いを復活させる。

さすがに一人で止めるのはきつい。

踏ん張りきれずバインドを破壊される寸前、緑色の鎖が竜巻に絡み付く。

「遅くなってごめん」

「本当だ。もう駄目かと思っただぞ」

停止させようとする二本の鎖と逃れようとする竜巻のぶつかり合い。ジュエルシードの竜巻は力が強く、依然として弱まる気配がない。今のところこちらが有利だが長期戦は分が悪そうだ。

一瞬も気が抜けないこの状況、流れをこちらに引き寄せせるかのようにオレンジ色の鎖が横から伸び竜巻を拘束する。

「フェイトの使い魔か。手伝ってくれるとはな」

「アルフってんだ、覚えときな。今はこれをどうにかしなきゃだからね。今回だけだよ」

ふんっ、と顔を背けるアルフ。

「デレた………のか？」

となると、私はいつフラグを建てたのだろうか。

戦いを通じて互いのことを知り、ぶつかり合ううちに惹かれていった、とか？

あり得ない、見たところアルフは生物学的に私と同じ性別だ。そんなことあるはずがない。

だが、もしアルフがそっち側だったら？

いや待て、そもそもアルフはツンデレなのか？あの反応だけど決め付けるのはまだ早いのでは？

「っ」

「ほら、ポケットとしてるんじゃないよ」

危ない危ない、つい考え込んで気を緩めてしまった。

甘くなったチエーンバインドに魔力を送り込み持ちなおす。

考え事は後にしよう。

とりあえず三つのチエーンバインドにより竜巻も完全に拘束され、封印魔法を待つだけ。

なのはたちの方を向くと彼方も準備OKのようだ。

巨大な魔方阵を敷き、膨大な魔力の圧縮が始まる。

「デイベーン」

「サンダー」

そして魔力を極限まで注ぎ込まれた砲撃魔法が紡がれる。

「バスターツツ!!」

「レイジツツ!!」

閃光、轟く金の雷と桜色の光の帯が竜巻と接触。

竜巻は為す術なく蹂躞されかき消され、莫大な魔力衝突による余波が発生。辺りを激しい衝撃が襲い、耐えるように手を顔の前で交差させ目を瞑る。

巻き上げられた海水はスコールのように降り注ぎ、私の身体を濡らし始める。

もう収まっただろうか、ゆっくりと腕を下ろし目を開く。

先程までとは違い雲が明け晴れ空が見える中、視界にはジュエルシードを挟み向かい合うのはとフェイトが飛び込んできた。

そこには二人の少女がいるだけだが、何処か幻想的な雰囲気を出している光景。思わず見惚れてしまいそうだ。

「友達に……なりたいたんだ」

なのはから出たのは小さな願い。『友達』という大切な存在を望む言葉。

幼少期に寂しさを味わったなのはだから分かった寂しそうなフェイトの瞳。

興味本意ではない、況してや同情でもない。

ただ優しい目をした少女と分かり合いたいという純粹な気持ち。

この想いはフェイトに届くだろうか。いや、届いて欲しい。

なのはの願いはおそらく世界で一番美しく濁りのない願いだろうか。

「空気が変わった？」

人知れず呟く。

さっきまで吹いていた海風はピタリと止み、辺りは不気味なくらいに静まり返っている。

おかしい、何故か嫌な予感がする。

気になり目視で周りを探してみる。

しかし、視界は一面の青い世界、不審な点は見当たらない。

杞憂だな、と思い視線をなのはに戻す。

ん、フェイトの頭上で空間に歪みが生まれている？

反射的に二人へと全速力で飛ぶ。

「二人とも、今すぐそこから離れろ」

叫び終わると同時に、空間が裂け文字通り紫電と言つような雷霆が落ちる。

だが、攻撃は雷鳴を轟かせ戸惑うフェイトの前をすり抜ける。

外した？いや、この手の攻撃は初撃で空間をこじ開け本命は次のはず。

初撃を見るに狙いはフェイトか。

距離がそんなに開いてなかったのが幸運か、次弾の前にフェイトの上方にたどり着く。

タイミングはバッチリ、上空からは間髪入れずに本命がやって来る。

『Round Shield』

右手から出た灰色の防壁が重たい一撃と真っ正面からぶつかる。

「つつ、破られる!？」

直撃とともに即座にシールドがひび割れ始める。

有りつたけの魔力を流し込み食い止めるが崩壊は止まらない。だ、駄目だ、保たない。

私の頑張り虚しく無惨に砕け散るシールド。そして無防備になった私とフェイトへと容赦ない一撃が降り注ぐ。

「がっ、ああああああ」

全身を経験したことの無い激痛が襲い、肺から空気が漏れていく。

「かはっ」

い、息が出来ない。

意識が意識が……。

そっだ、フェイトは、フェイトはどうな

第8話（後書き）

次回は閑話の予定です。
一週間以内に書けるか……

閑話1（前書き）

久しぶりに三人称で書いたので読みにくいかもしれないです、すみません。

次は無印最終局面から始まる予定です。

閑話 1

薄暗いアースラ艦内の医務室前のベンチに腰掛ける小さな二つの人影。

少年と少女は二人ともただ友人が運ばれた部屋に繋がるドアを見つめ、お互い口を開かずにいる。

悲痛な面持ちをした少年の手には友人の持ち物である、あちこちに亀裂が入った小さな金の腕輪が握られている。

涙を溜めた少女の両手は祈りように固く組まれ微かに震えている。撃墜された友人をアースラまで運んだのは自分だが、ユーノの顔色は良くなかった。

目立った外傷はなく出血もなかった。非殺傷設定だったのだろう。命に別状がないのは見た目から分かっている。

だが、魔導士にとって大威力の攻撃魔法の怖さは直接の外的損傷よりもリンカーコアへの内的損傷である。過剰な魔力ダメージはリンカーコアに歪みを生じさせ、最悪の場合二度と魔法が使えなくなる可能性もある。

あれだけ魔法に熱心で魔法が大好きな幼なじみのことだ、魔法が使えなくなったと知ったらどんなに落ち込むだろうか。

明るく、優秀ながらも何処か抜けている幼なじみの悲しむ顔は見たくない。

もしかしたら自ら命を断つなんてことも……と幼なじみの性格からはあり得ないだろうこともつい考えてしまう。

「ユーノ君……シーナちゃん大丈夫かな？」

「分からない。けどシーナならきつと いや絶対に無事だよ」

言い聞かせる相手は自分かなのか。

現役の管理局員が犯人の攻撃魔法により意識障害になり、今も意識が戻らないと聞いたことがある。そんな縁起でもないことが浮かんでは消え、医務室のドアが開くのをじっと待っている。

そろそろ一時間くらい経つか。

ふと時間のことを考えていると、穴が開くほど見つめていた自動ドアが開け放たれる。

焦る気持ちからか、ユーノは思わず出てきた医師に詰め寄る。

「先生、シーナは」

「大丈夫、命の心配はないよ。リンカーコアへの影響も出ないだろうね。けど魔力ダメージが大きいから意識が戻るのは一日二日くらいかかりそうかな」

「そう……ですか」

懸念していた事はどうやら避けられたようだ。

ユーノは安堵から緊張していた全身の力が抜ける。なのはも涙を溢しているが、その涙は悲しみではなく友人の安全を喜ぶ涙である。

「意識はないけど顔を見るかい？」

医師の言葉に頷き、二人は医務室の友人が眠るベッドへと近づく。

純白のシーツの上に、解かれた黒髪の幼なじみは無垢な寝顔でベッドに横たわっている。

気持ち良さそうに寝息までたてて……どれだけ心配したと思っていたんだ。

声には出さず心の中で幼なじみに文句を言う。

昔から君は無茶をすればかりだ。いつも心配させられる自分の身に

なってみろ、と。

そうだ、目を覚ましたら今までの思いの丈を全てぶちまけてやろう。思い出の品である金の腕輪をそっと幼なじみの枕元に置いて静かに決意する。

「ユ、ユーノ君どうしたの？何かニヤニヤしてるの」

「な、なんでもないよ」

「そ、そう？」

なのはの言葉で知らず知らず口元が緩んでいたと気付き、慌てて取り繕う。

そういえば幼なじみを怒るのは久しぶりだな、と考える。

最近では幼なじみはクロノ執務官に魔法を習い始め、自分とは魔法の話しをあまりしなくなった。

だからだろうか、日常で接する時間は変わらないが幼なじみが何処か遠くなってしまったと感じていた。

決して寂しいわけではない、と思う。

そう、これは子ども達の巣立ちを見守る親の気持ちなんだ。

だからこれはやきもちや八つ当たりなんかじゃない。親が子どもを叱るのと同じなんだ。

なのはと会話しながらユーノはマルチタスクでそんなことを考えていた。

「はい、了解です。お疲れ様でした」

大型のモニターが配備された執務官補佐専用のスペース、エイミイはリズムカルに慣れた手付きでコンソールのディスプレイを操作し回線を閉じる。

「クロノ君、嬉しいニュース！シーナちゃん無事だったさ」

「そうか、それは良かった」

腕を組み壁に寄り掛かるクロノは言葉少なくそう応える。

他人が見れば、冷たい奴だと思つかもされないが長い付き合いだ。無愛想なこの友人は今も仏頂面を崩さないが、エイミイはクロノの声色が僅かに弾んでいたのを敏感に感じ取る。

「もー、もつと素直に喜べばいいのに。ほら、ヒヤッホーって言いながらガッツポーズで飛び上がるとかさー」

「そんなこと出来るか！それに無愛想なのは生まれつきだ。放っておいてくれ！」

口調強めにそう言うとクロノは顔を背けてしまう。

他人に言われるまでもなくクロノ自身も直そうと頑張っているが、長年染み付いた性分だ。そう簡単にはいかないのだ。

「それよりもエイミイ、事件の詳細な資料は集まりそうか？」

「うーん、この前決めた線で探してるんだけどね。ある時期からの足取りが掴めないんだよね。そこが分かれば」

「頼むぞ。僕の推理が正しければジュエルシード事件の黒幕と今回

のアースラ襲撃の犯人は同一人物のはずなんだ」

コンソール上に縦横無尽に指を走らせるエイミーの手が止まり、小型ディスプレイに一人の女性の画像が表示される。

少し年齢を重ねているが、十人に聞いたら十人が美人だと言うであろう女性。

クロノが幾人の容疑者候補の中から絞ったのはかつて大魔導士として名を馳せた人物。

「プレシア・テストロッサ　かつて大魔導士と呼ばれた偉大な人物」

「そう、彼女だ」

離れた空間から大威力の魔法を行使出来、電気の魔力変換資質を持つ人物となるとその数はかなり限られたものになる。他の人物がプレシアに罪を擦り付けようとしている可能性は殆どないだろう。

理論上、魔力光は魔導士各々生まれた時から生涯を通して変わることはないとされている。また魔力光を変える方法は未だ発見されておらず、不可能だとも言われている。

アースラを襲った雷の色は紫、情報ではプレシアの魔力光と一致する。

これだけの情報と証拠を集め推理した所、自然と彼女に行き着いたのだ。

だが、唯一不可解なのが今回の件についての動機。

何故ジュエルシードを求めるのか、その理由が分からない。

彼女に関する情報もある時期から管理局データベースでは一切更新されておらず、判断材料がまだまだ足りないのが現状。彼女の居場所も未だ分からず、捜査は難航していた。

「管理局のデータベースが駄目でも情報源は他にもあるからね。お姉さんにまっかせなさい！だからクロノ君も頼むよー」

「ああ、勿論だ。必ず捕まえてみせるさ」

エイミイの軽口に当たり前だ、と返すクロノ。

右手をグッと握り気を引き締める。

不安ではないかと聞かれれば不安である。

何せ敵対する相手は過去に次元世界有数の魔導士ランクオーバースの判定を受けた実力者。

全盛期は過ぎているだろうが、油断すれば間違いなくやられるのはこちら。それに容疑者は逃げるためならクロノを躊躇いなく殺すに違いない。

待ち受けているのはまさに命を懸けた戦いだ。

しかし、自分は次元世界の平和を守る時空管理局の執務官。怖いからと逃げ出すことは出来ないし、する気もない。

絶対に捕まえてみせるさ。

差し迫る戦いに向けクロノは静かに闘志を燃やすのだった。

第9話（前書き）

書き直しを何度したことか。

書いてて何度おかしかったか。

指摘や修正がありましたらご指摘していただければ幸いです。

第9話

「自分が何になりたいかなんて考えたこともなかった」

毎日をただ何となく過ごして、周りが行くから進学して　私には
“自分”というものがなかった。自主性がなかった。周りに迎合し
ながら生きてきたのだ。

将来もこのまま会社に就職してサラリーマンになるのだろうと思っ
ていた。

就きたい職業なんかなかったし、得意なこともなかったから。
周りも同じだと思っていたけど違った。

教師になりたいやつ。公務員になりたいやつ。クリエイターになり
たいやつ。銀行員になりたいやつ。皆それぞれ希望や夢を持ってい
た。

考えがないのは私だけだった。そのことが分かった時、置いて行か
れた気がした。

スポーツや趣味といえるものをしてこなかったわけではない。幾つ
か10年以上続いたものもあったし、平均より上手いと自他ともに
認めるものもあった。

でも、どれも魅力を見出せず熱中出来なかった。結局、全部やめて
しまった。

何をやってても人並み。特徴のない平均的なやつ。それが周りからの
私の評価だった。

周りに合わせてきたのは人に嫌われなくなかったからだ。
付き合いが悪いやつ。ノリが悪いやつ。そう思われて友達の外輪から
外されるのが怖かった。

何も無い私が友人を作るには八方美人になるしかなかった。

面白くないけど笑って、話が合うように興味のない本やテレビも見
た。

努力の甲斐あって私は友人がたくさんできた。事あるごとに遊びに誘われたし、学校でもいつも隣には友人たちがいた。

けど、進学してからは連絡を取り合うこともなくなった。

私が見んなとは一人離れた大学に通っているからだろうか。最初はそう思っていた。

違った。少し経って理解した。

所詮、表面的な薄い関係だったのだ。

友人だと思っていたのは私だけだった。彼らからすれば精々扱いやすいやつ程度の認識だったのだ。

「私に友人なんかいなかった。一人だった」

勿論、そんなやつに親しい人なんかできるはずもない。上辺だけの関係。

いつまでも一人だった。

そしてふと立ち止まった時、私には何も無いのだと気付いた。

特技なし、友人なし、夢なし。我ながらつまらない人間になっていた。

「寂しかった。辛かった。自分が嫌いだった。自分に自信がなかった。自分を変えたかった」

そう思うだけで行動しない。いや、出来なかった。

どうせ自分は変わらないのだとやる前から分かっていたから。

私は一生変わらないと諦めていた時、突然転生させてくれると言われた。

これは転機だ。これを機に今度こそ自分を変えよう。決心した。前世の記憶は三歳の誕生日に頭に浮かんできた。

最初は性別が違うことに戸惑ったがそれもなんとか克服した。

スカートも履けるようになったし、口調も女の子らしくしようとした。

転生して一番驚いたのは魔法の存在だった。

ファンタジーの世界だけに存在すると思っていた魔法。

知れば知るほど魔法は奥深いものだと分かった。

のめり込むのにそれほど時間はかからなかった。

数多くの本を読んで、理論を考えて 熱中している間は他のことは全て忘れることができた。

初めての経験だった。いつの間にか魔法が大好きになっていた。

ある時、私と同一歳で天才と呼ばれる少年がいると知った。魔法や考古学に精通している賢い少年らしい。

その頃の私は考えた魔法の理論を他人と話し合ってみたいと思っていた。名前はユーノ。

三歳で天才と呼ばれるユーノに興味を持った。どんな魔法の理論をもっているのか。どんな知識があるのか。一日中彼のことを考えるようになっていた。

なので、気になったから会ってみた。第一印象はひ弱という言葉が似合うがり勉少年。

けど、話して印象は変わった。魔法への造詣が深く、思慮深くて落ち着きがある。

私たちは毎日話し合った。

ご飯を食べる時も風呂に入る時も寝る前も起きてからも。

多くの時間を共有した。

そしていつの間にか親友と呼べる仲間になっていた。

お互いそのことは言ったことはないが確信はある。

証明はできない。親友とは気付いたらなっているものだと思うから。

私は今度こそ友達ができた。嬉しかった。

ある日、ジュエルシードと呼ばれる危険物を発掘した。

次元震を起こして世界を消滅させる危険がある物体。

そんなものを一部族が保管するのは無理だと判断した長老は時空管

理局にジュエルシードを渡すことを決めた。

責任者はユーノ。輸送するだけの簡単な仕事のはずだった。

しかし、すぐに終わる仕事は厄介事に変わった。

事故が起きてジュエルシードは地球に散らばってしまったのだ。

私はジュエルシード回収に向かったユーノを追いかけて地球へ来た。嫌な思い出溢れる地球は不思議と嫌な感じがしなかった。

地球に来てすぐになのはと出会った。なのは大人びた優しい心を持つ少女だった。

なのはともすぐに友達になれた。

ユーノとなのはとは心から笑いあえたし、素直に自分の気持ちを伝えられた。

以前の私では考えられないことだ。

ジュエルシード搜索と同時に私とユーノはなのはに魔法を教え始めた。

なのはは魔法の才能も凄まじく魔力量と相まってすぐに私は追い抜かれた。

教えていた身としては嬉しくもあるし、同時に悔しかった。

やはり私はどんなに頑張っても一番にはなれないんだ。そう気付いた。

口には出さなかったがなのはの才能に憧れ、嫉妬した。

私の頑張りが無意味だったと思ってしまうた。才能あるものには勝てないと失望した。

だから、クロノ執務官に鍛えてもらえると決まった時は歓喜した。

「これで追いつける。追い抜ける。努力しよう。それしか私にはできないから」

まだまだなのはたちには遠く及ばない。倒れてばかりで周りには迷惑をかけてばかりだ。

「それでも　それでも私は頑張りたい。また後悔したくないから
今はまだ何がしたいかは分からない。
でも、友達や大切な人たちの信頼を裏切れることは絶対にしたくない。
自分の今までの頑張りを嘘にしたくない。」

「何度止まってもいい。進み続ければきっと届くから」

自分を信じられる、“自分”を貫き通せる自分に

「ここはどこだ……」

「ん、気がついたのかい」

目覚めてすぐ視界に飛び込んできたのは医務室の天井と覗き込むアルフの顔。

上半身を起こし周りを見渡すと、少し離れたベッドにフェイトが寝かされていた。

そうだ、確か私はフェイトを庇って　駄目だ。その後が思い出せない。

「何も覚えてないって顔だね。あんたは鬼婆の攻撃からフェイトを庇おうとしてまとめて叩き落とされたんだよ」

アルフに言われて鮮明に思い出す。

轟音を鳴り響かせ降り注ぐ紫電が私のシールドを紙のように破って

……。
まだ身体が痺れてダメージが残っている。それほど凄まじい攻撃だったのか。

しかし、私が落とされたということは

「それじゃあ、フェイトも？」

「いや、違うよ。フェイトは別のことで……ね」

「そうか」

「聞かないのかい？」

「簡単に言えることじゃないんだろう。それに、フェイトの許可もとってないしな」

「ふーん、あんた変わってるね」

「よく言われる。けど、私は私だ」

「やっぱり変わってるよ」

苦笑いするアルフに横眼で見つつ、医務室に備え付けられているモニターに目を移す。

そこに映しだされていたのはなのはとユーノ。そこに映しだされたレイジングハートを構え、撃ち出されたディバインシューターが一機また一機と傀儡兵らしき鎧を砕いていく。

「なのはたちが戦っている？」

「そう、フェイトの母親　プレシアを捕まえるためにね」

「プレシア？まさかプレシア・テストロッサか？」

「おや、知ってるのかい」

「当たり前だ。プレシア・テストロッサといえば魔導炉開発の第一人者で数少ないオーバーSランクの大魔導士。知らない奴の方が少ないくらいだ」

あのプレシアを捕まえるのはかなり危険なことだろう。

実力もそうだが、彼女ほどの人物が侵入者を想定していないはずがない。

映像で見えた傀儡兵も数が多そうだし、まだまだ大物が控えているとみた。

こんなところで休んでいる場合じゃないな。

動かない身体に鞭を打ち立ち上がる。

「おっと」

「危ない！」

立とうとした結果バランスを崩すが、アルフが素早く助けに入ってくれる。

地面を踏み締めて体重を支えようとするがふらついた。思った以上に足元が覚束ない。

「ちょ、ちょっと何してるんだい」

「何って、助けに行くつもりだ」

「助けにつて……身体もデバイスもぼろぼろじゃないか」

アルフの視線を追う。

その先には、枕元に今にも砕け散りそうなアイギスがあった。自然と足がアイギスへと向かっていた。

ベッドに座り、相棒を見つめる。

長年連れ添ってくれた相棒は見る影なく、淡く鈍い灯りを反している。

ゆっくり目を閉じ、アイギスを両手で胸に抱く。

ひんやりと冷たく、所々ひび割れているのが感触で分かる。

私が不甲斐ないばかりに………本当にごめん。

けど、友達を助けるために……もう少し、もう少しだけ私に力を貸してくれ。

「それでも行きたい。後悔しないために」

アイギスをいつもの位置につけ、アルフを真っ直ぐ見つめる。

「そうかい。それじゃ、行こうかね」

「アルフも？」

「あたしも行こうと思ってたところさ。それにあんただけじゃ心配だしね」

「それはありがたいんだが、フェイトはいいの？」

「フェイトは一生懸命頑張ってきたから、今は休んでほしいんだよ。その後、ゆっくりでいいから元のフェイトに戻ってくれれば……さ」

そういうアルフの顔は悲しい眼をしつつも笑っていた。

「なら、行くか。アイギス！」

『Set up』

バリアジャケットを展開、マントを翻し前へ歩み始める。

向かう先はプレシア・テストロツサの居城。目的は友達の救援。

こんな不幸を齎す事件は早く終わらせなければいけない。

そして、その後は出来ればフェイトとアルフを手伝いたい。

彼女たちの事情は知らないが、この歳の少女がこんな不幸に遭うのは見過ごせないから。

「さあ、歩き始めよう」

「はあッ！」

豪快な風切り音をたてながら振り下ろされる剣を上昇して避け、騎士型傀儡兵の側面に右足を振り抜く。

魔力強化された一撃は頑強な装甲を凹ませ、私の何倍もの質量を持つ巨体を壁へと吹き飛ばす。

『Stinger Bullet』

飛んだ方向へ右手を突き出し、追撃としてスティンガーバレットを

発射。

魔力弾が尾を引きながら目標に命中し爆散。

「次は」

片づけても片づけても湧いてくる傀儡兵がいないか周囲を警戒するが特に見当たらない。

振り返ればガラクタとなった傀儡兵の残骸が山となっている。

「そつちも終わったみたいだね」

「どうにかな。ふう、それにしてもこいつらはどれだけ倒せばなくなるんだ。早くユーノたちに追い付きたいというのに」

「さあね。あたしもここに傀儡兵がいるなんて知らなかったよ。そろそろ追い付くとは思っただけどねえ」

先を急ぎたいものの、傀儡兵がどこからか湧いて邪魔して思うように進めていない。

その神出鬼没さはGではないかと思ってしまうほどだ。煩わしいっいたらありやしない。

「いっその事、殲滅魔法で一気に。 。
ダメだ。私、殲滅魔法使えないんだった。

練習してはいるんだがなかなか上達しないんだよな。

やっぱりコツとかあるのだろうか。

今度師匠に聞いてみよう。

さてと、愚痴っついても仕方ない。

「分からないんだったら仕方ないさ。ユーノたちは近くにいるのだろうか？なら、先を急ごう」

前方を確認しながら全速力で走る。
傀儡兵の残骸がある以外は代わり映えない廊下がどんどん後ろに流れていく。

ガラクタといつても、横目に入る傀儡兵は嫌悪の対象以外の何物でもない。

意志がないとはいえ傀儡兵の性能は高い。バリア能力と刀剣類を使用した物理攻撃。

魔導士ランクでいえば平均してAランクくらいか。

今のところ、構築した新魔法のお陰で善戦できている。

師匠の魔法を参考にしながらみんなで作り上げた私の魔法。

弾速と貫通力に特化させ、相手に届くことを目指した魔法。

まだまだ改良が必要だろう。けど、私の想いを貫き通すには十分だ。

「ん、何か聞こえるね。これは　近いよ」

私よりも遥かに優れた感覚を持つアルフが何かを聞き取った。

おそらくユーノとなのはだと思うが……分らない。

速度を緩めず、警戒を怠らずさらに進む。

段々距離が狭まって行くにつれ、戦闘していると思われる爆発音と衝撃音が聞こえてきた。

そして、少し広くなった通路で誰かが戦っているのが見えてきた。やっと追いついた。

眼前には傀儡兵が数えるのがめんどくさいくらいいる。

全く、少しは自重して欲しいな、プレシア・テストロッサ。

会ったら文句の一つでも言ってみよう。

よし、ゆっくりと話したいから、まずは掃除といきますか。

「ステインガーシューター、ゴーツー!!」

第9話（後書き）

第一期を終わらせるのが少し早い気がするのはきつと気のせい。

シーナのキャラは本を読んでいてふと思いつきました。

初の成長物語なのでどうなるか分かりませんがよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6149m/>

【原作知識なし】リリカルでフェレットなスクライア物語【転生、TS】

2010年11月6日13時24分発行